

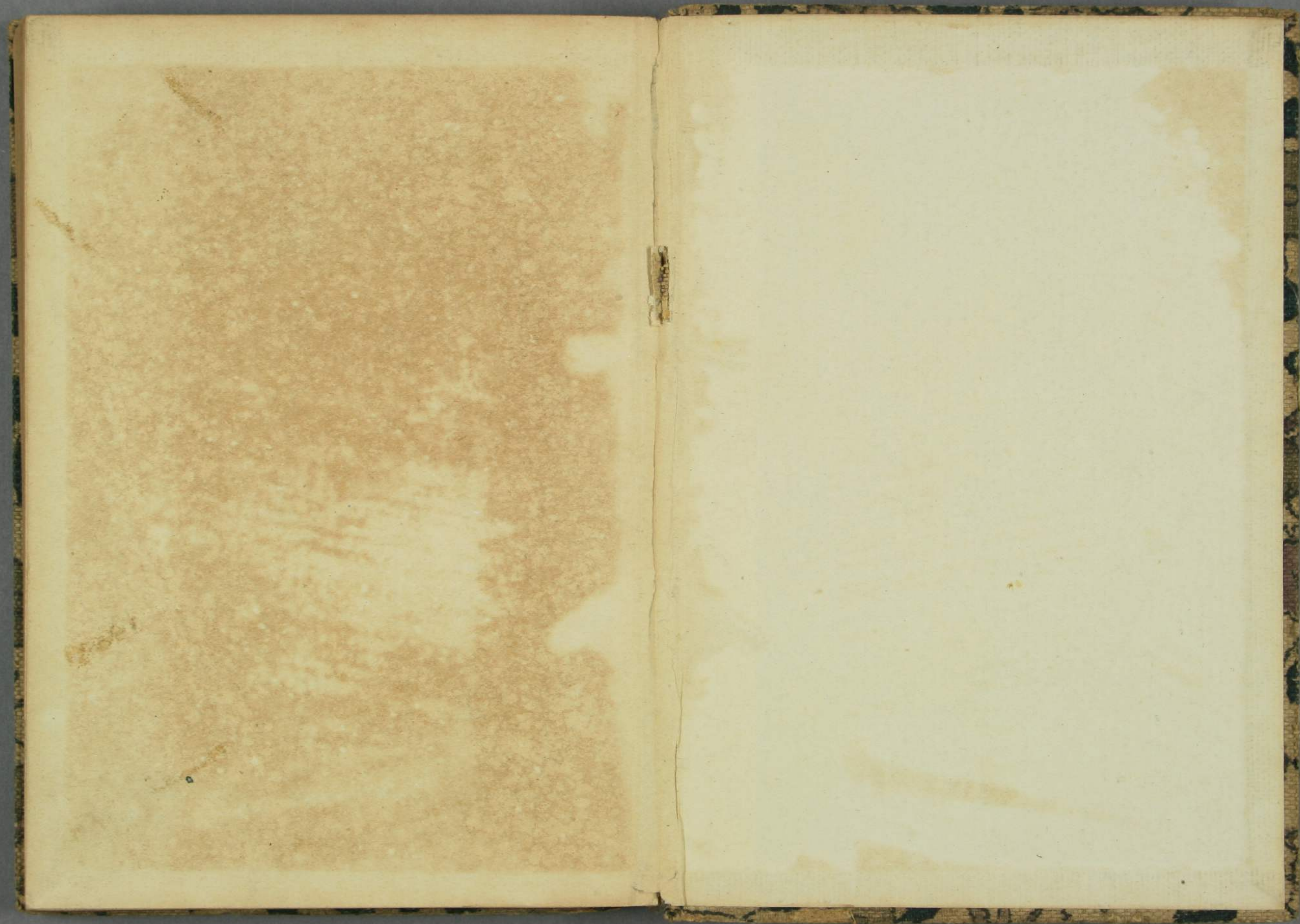


獨步手記











獨步手記

國木田治子編

□天分社出版□



目次

信仰生活……………一  
ワーズワースの自然主義と余……………七三  
唯暗を見る……………八三  
天地の大事實……………九六  
精神問題に關して中桐綱島兩氏に  
與へたる書翰……………一二三  
感想斷片……………一五〇



### 信 仰 生 活

友よ左に記する者は吾が「欺かざるの記」中に誌されし處なり、事實の一編は嘗て君に報じたりと記憶す。兎も角も余が自から宇宙との關係極めて曖昧なることを知るに至る試験は是なり。「欺かざるの記」は直感の筆なり。故に前後重複、亂雜、不明、又他人に示すに堪へざるもの、されど茲に一字をもかへざるを欲す。吾が苦悶、熱情はたしかに又此の亂文のうちに在れば也。

(五月)十八日(前略)



吾今寂寞の谷を獨歩し歸りて此の筆を採る也。

戰慄は吾が頭心より足の爪先に及び、吾をして幾度か勇を鼓せしめたれども吾遂に恐怖のために勝たれぬ。言ひ甲斐もなき事なる哉。

吾何故に恐ろしきを知らず、只だ夜陰は恐ろしげ也。

墳墓と森林とは何故に夜に於て恐ろしきか。

嗚呼高天の下、上帝の宮に在りて吾は恐れぬ。されど吾發見を得たり。

吾が知らざりし高き眞の世界は吾が恐怖の關門の奥に在り。寂寞として只だ森と溪流と星影と月光と谷風と梟聲と高天と吾との世界の如何に眞實の世界よ。

若し吾に一點愚かなる恐怖の念なく、心まことに此の寂寞を愛し、靜かに森の下に星影と月光のもとに、眼を開きて沈思するを得ば吾が地上の感染衣は全く落ち、存在の眞感に入り、神、自然、人間、吾が使命等に附て更に大に發明すべきに。

然り吾が眞の書籍、眞の教、眞の世界は吾之れを發見せり。深夜城山の上に在り、月下無人の森林に在り。

「吾」は實に此の世界に在りてこそ發見し得る也。

これよりは冷風を愛する夏來る也、よし吾此世界に入らん。

「恐怖」！ 實に吾が信仰の極めて弱きを證明す。



信仰とは空言なる哉。若し此の社會と境遇と宇宙の何れの處にあるとも一點の恐怖の感だにあらば、信仰は空言なり。「神」とは空言なり。「神」とは暗きと實意義との神のみ、愛は無意義のみ。

「恐怖」よ去れ、爾若し去らざば、吾が胸を検査せざる可からず。吾は何故に恐怖するかと。

月は人間の敵か、星は人間の敵か、暗き森とさゝめく溪流とは人間の敵か、大空は人間の敵か、暗き影は人間の敵か、「深夜」は人間の敵か、墳墓の白骨は人間の敵か。

靜かに深く之れを思ふべし。

嗚呼、何故に敵か。

嗚呼天地間に於ける人間、爾は小なる哉。  
恐怖と無明とは爾を小にす。

怒濤風浪の破船の甲板の上に於て恐怖するものは誰れぞ、深山絶竄猛獸出沒する時に於て恐怖する者は誰れぞ、吾人は勇氣を欲せず必ずしも勇氣を望まず、只だ信仰を希ふ、安心立命を希ふ。

嗚呼、此の天地。人間の存在。精神性慾。互に關係する處何處ぞや。

恐れ、いらだち、争ひ、そねみ、惡み、苦しみ、これが、時に幻の如き喜びを喜び、以て此生命を消す。吾とても然り、抑も此生存は空か。



空とは空の事なり、空とは空なり。

吾たしかに茲に在り。

十九日

嗚呼森こそ何ぞ、吾と何の關する處ある。

嗚呼山谷、これ何ぞ吾と何の係はる處ぞ。

谷梟月明寂寥これ何ぞ。

眞の信仰よ來れ、眞の直感よ來れ、眞の希望、眞の喜び、眞の安心よ來れ。

今又寂寥の谷を歩して歸りぬ。

明月に際す。吾が夜の最も美なる時なり。

恐怖は去りぬ、されど未だ全く去らず。

今夜は松の森を過ぎて、坂の頂の平場に出でたり。

人生は眞面目なり。

吾、白狀す、吾未だ寂寞たる山林月光のもとに神を感じる能はず。吾に斷じて大なる堅き、眞の信仰あるなし。

只だ自然は冷々然たり、黙々乎たり、只だ夫れ悠々として無限なるを感ず。

吾が魂何處にかある、吾が靈何處にかある。

吾は小なる哉、吾は只だ五官に由り周圍のものを多少さぐるに過ぎず。吾が眞は只だ星と大空と月明と森と墳墓とを見るのみ。是れ何ぞや。吾は更に深遠なるものを見る能はざる也。



嗚呼吾肉體は小なる哉、此の冷然たる土塊すら吾が肉體を永久に埋むるに一杯の土を要するのみ。見よ月光のもと墳墓は累々たり。之れぞ寂々として只だ夫れ石のみ、嗚呼人何處にかゆきし。

吾も亦た只此心とならんのみ。

物質は小なり。森も月も山も只だ物質とする時は、如何に人間の世界は狭くして淺き事よ。吾、此の狭き淺き世界に苦しみて葬らるべきに過ぎざるか。

神あるか。靈あるか。

嗚呼此の存在の意味は如何。

寂寞の境に吾が情は只だ荒れ只だをのゝく。嗚呼愛何

處にある、美何處にある。

友よ、君は必ず此の亂文の亂文たるを捨てずして精讀せらる可きを信ず。願はくば精讀せられよ。吾此亂文のうち確かに一つの眞理を見るなり。試みに「恐怖」てふ文字を「地上先入の感染」とあらためて而して後沈思せられよ。

吾何故に恐怖したるか。言ふまでもなく、小兒の時以來、ただ周圍の言語、周圍の傳説に感染せられ、知らず知らず無人寂寞の深夜山谷墳墓の傍に戰慄するに至りし也。嗚呼豈に只だ「恐怖」のみならんや。虚榮の念、批評の心、物質的の考、小我の世界觀、悉く之れ地上先入



の感染ならぬはなし。嗚呼吾はかくの如くして此の無限なる、此の不思議なる、此の全體なる宇宙、吾が生命の存する處、吾が生命のもとづく處、吾を支配し、吾を失滅せしむる此の宇宙自然に就て極めて曖昧なる感想を懷き、且つ其の曖昧なりし事すらをも知らずして盲動したりし也。

吾は實に火の如き信仰を希ふ。然らずんば水の如き死亡をえらばん。否な自然は吾をして必ず其の一つをとらしめん。何となれば、吾最早曖昧の盲動を受くる能はざれば也。「自然」の永久の火流れて吾が心靈を衝き、吾が心靈も亦此の失命其のもの、極めて幽玄偉大眞面目なる

ことを感じたれば也。

嗚呼吾を動かすものは何ぞや。友よ茲に於てか吾れ遂にスピックスの前に立ちぬ、吾を動かすものは虚榮のみに非ず空想のみに非ず、これ等人間の淺ましき先入の感染と共に更に眞面目なるものは來りぬ。

眞の信仰よ來れ、是れなり、此の熱情なり。友、吾已にスピックスの前に立つ。此のスピックスは其の謎に對して決して曖昧なるを許さず。必ず明答を與へざる可からず。

嗚呼吾をして願へば更に光明に進ましめよ、更に神聖の階を登らしめよ。友よ吾を動かすものはこれなり。



げに此の宇宙は不思議なる哉。これ口頭の評語に非ざる也。寂然として燃え、幽然として沸き、悠々として轉じ、無限より無限に運行す。古今來此のうちにつゝまれ、生死此うちに行はれ、榮枯此うちに現せらる、之れ吾が心靈に天火の如くつき來る事實なり。避く可からず。忘る可からず。強ゆ可からざる事實なり。吾實に此の宇宙に生存す。生命其ものゝ如何に不思議に、吾其ものゝ如何に不思議に、心靈其のものゝ如何に不思議なるかを感ぜざらんと欲すとも得ず。

されど吾未だ全然自然の兒として此自然のうちに立つ能はざるを痛嘆す。之れ實に、吾日夜の苦悶なり。吾多

く批評傍觀の世界に住み、物質的の淺感に迷ひ、虚榮と空想と肉慾の暗黒に盲動し、激昂し、悲憤し而して忽ちにして又倦憊し放漫に流る。而も吾所謂道德なるものを願はず。道德なる名のために先入的感想に支配せられて只だ常識の満足に満足する能はず。

嗚呼自然よ。吾只だ爾を呼ばん。吾が生命の心靈は實に之を欲す。只だ之れを欲す。

今井君足下、かるが故に余は前にも一言したる如く、今日吾國に於て、宗教界にせよ、文學界にせよ、政治界にせよ殆んど尊敬心服を償ひする人士を見出す能はざるを悲しむ。



今は頻りに宗教哲學の喋々せらるゝ時代なり、されど決してシンセリテイの時代には非ず、「近代」の福音甚だ熾なり、滔々たる人心悉く其の洗禮を受く。されど之れ批評、物質、懷疑の福音のみ。嗚呼自然の見、何處にか求めん。吾生れて此の自然のうちに立つ。時代の紛々何かあらん。内なる虚榮の懷、倦憊の念よ、専ら外なる「近代」の空想よ去れ。吾が頂上、月光あり、天の光を放つ。吾が心靈聲あり、「自然よ」と。然り吾只だ自然の兒たらんのみ。

心鏡一度び拂拭せられて射映する處のもの全く其の趣を異にす。吾が心靈一度び宇宙のミステリアスのうちに

呼吸し、暗黒と光明と悉く天來自然のものなりて落ち來るに及んでは吾自身已に自然のものなり、自然の見なり。

吾は吾が智識の如何に宇宙のミステリアスに對しては、數ふに足らぬかを感じ得す。而も人心の最底最幽の邊、鬱勃奔逸にして且つ自由するものあり。僅かに吾をさへて此の大宇宙に對せしむ。吾はこれに由つて大に、これに由つて強く、之れに由りてさとく、信仰の火、こゝに小き、希望の光茲に發す。

今井君足下以下、余が筆にまかして馳するものは則ち以上の如き「吾」の尤も自由なる聲なり。



今井君足下、以上吾が告白も恐らくは半ば只だ言語の空しき響ならんことを悲しむ。人間は此の點に於てたしかに一種の弱點を有す。水あり岩をつんざいて出づ、始めて自然に涌くなり、其の涌くを知らずして涌く。否な涌かざるを得ざる也。故に岩を裂く。故に玉の如く清し。人間の言葉とても然り、殊に信仰真感の告白に於て然り。若し夫れ、信仰の火根底に天火の如く燃え、真感の情、泉の如く奔流し、又一點批評、思考迷忘のあとなきに於ては、其の告白詐出の言語、直ちに之れ預言なり、詩なり。されど未だ半身を地上の影に置き、時に一閃の電光の如き信念に打たるゝが如き人に在りては、則ち目下の全

の如きものにありては、其の告白も決して岩清水にあらざるなり、殊更に掘り出したる濁水も亦必ず雜る也。是れ實に悲しむ可き人間の薄弱なり。されど是れ如何ともし難き也。

吾は最早然す可きか、故に吾は最早黙す可きか。否、否、余若し只空しく言葉の鋤もて滴水を掘らんとして務むるものならば兎も角、自ら信ずる處によれば、確かに自然の洪流なきに非ず。奔出せざるを得ざるものなり。

五月五日の事、吾、四人の青年を伴うて近郊を歩し、遂に小丘に登りぬ。時に赤陽西に斜めなり。

舊城市、村落、田畝、川流、海灣、島嶼、悉く雙眸の



うちに落ち來る。白帆靜かに河流のあとを過ぐるあり。海波續く遙かに四國地を縹微のうちにつゝむあり。西に連る諸山は日を背うて立つが故に其の色紫なり。東に立つ峯々は日を受けて眠るが故に其の色輝き渡る。吾等此のうち立ち、草を敷て横はりけり。則ち仰いで悠悠蒼々たる無限の大空に對す。

高きに登りて大觀すれば人は自ら其の感情を高め來る。殊に西に沈む大日を送りて晩春の美和好風に自由に呼吸するに於ては。然り吾等は自由に語りぬ。

一個の青年自ら嘆じて曰く、天其れ此の如く無限なり。地其れ此の如く一小土壤に過ぎず。而も亦此一小塊すら

消滅するの時あらん。あゝ然らば紛々として經營苦心する處何の意味ぞ。皆な是れ空の空に歸するに非ずやと。天地其れ此の如く美なり、大也、廣し、無限なり。而して人心其れ此の如く悲し此の如く猛し。

吾默然として答へず、只だ哀然として夕陽に對しぬ。己にして答へて曰く、然り然り。此の地球、これ亡ぶべし、此れ小土塊のみ。されど吾等はたしかに宇宙のうちに生く。此れ事實なり。

吾が答は只だ此の語に過ぎざりき。青年は吾が言のうちひそむ吾が魂の聲をきく能はざりしが如し。

今にして思へば此の青年の如き感慨は吾も亦かつて起



りたり。靜かに天地に俯仰するに當ては、實に此の感なき能はざるなり。人それ空に歸す、大地も亦空に掃す、空の空なる哉、すべて空なり。

されど吾が魂は嚴然として曰ふ。然り空ならん、されど吾が生命は事實なりと。吾たしかに此のうちに人間は宇宙に立通して時間と空間とを突過すべき大信仰のはしを見る也。

而も吾と此の宇宙との關係や實に漠然たり。かの青年の如きに至つて更に漠然たり。若し夫れ冷々として此日を送り未だ嘗て宇宙の何ものたる事すら思ひつかざるが如きに至りては更に漠然たる也。

此の漠然や、凡てを漠然たらしむる根元なり。吾實にしかく感ず。此の漠然に居て而も或は知ると云ひ或は信すと云ふものは——所謂天下の人物、皆然り——心魂己に麻痺したるもの也。

何故にウオ氏は四十年の冷遇に安せしか。之れ湖處子の説かざる處也。

あゝウオーズウオースよ、人は弱し信仰は強し。

ミケル・アンジエローの前に大理石は置かれぬ。彼は鑿をとつて之れに向ひぬ。一打一撃、摩西の像は浮ぶが如くに理はれ來りけり。然り頑たる冷たる、黙たる石、生けるが如き、否な生ける、語るが如き、否な語る、血



あるが如き、否血ある、靈あるが如き否靈ある摩西の像は現はれたり。

是れ石、之れ鑿。相つなぐは何の方ぞ。是れ無限無窮の宇宙、是れ一個の人間の心、知らず相通する何の玄ぞ。

嗚呼口語に可ならず、筆記する能はず。幽妙にして神聖なる關係は天と吾との間にあり。

是れ事實なり。最初の最大、最後の最真なるの事實なり。耳ある者は聞け、眼あるものは見、心あるものは感ず。

然れど世人の通態は甚だ非也。彼等は耳あれども聽かず、目あれど觀ず、心あれども感せず。彼等は此の大事

實を忘却す。此の人間の道義信仰の因りて來る根本の事實を忘却して、却て支葉紛々事體に熱衷す。事體其ものには必ずしも空漠ならずと雖、根本の事實を忘却したる心、如何に此の事體の眞意を料理し得ん。末は末としての意味あり。されど末に走り末に埋没するものは、彼自身空の空、虚の虚、故に哲人は之れ憐れみ、之れ叱咤す。異なる哉彼等の狂愚、彼等は頑強にも辯解して曰く否否吾等が従事し思慮し料理する處是れ人間實際の事なり。而して窃かに得々乎却て哲人を以て空想のものになさんと欲す。是れ哲人が尤も悲しむ、事實なりとは知らず。悲しい哉。



而して吾れも亦動もすれば彼等の仲間入りせんとはする也。嗚呼是れ吾に取つて痛極の事ならずや。何故に何と宇宙との關係はかくも漠然たるか。何故に吾自然の兒として此の不思議に最大の最初、最眞の最終の事實に對する能はざるか。

エマルソンの曰く「過ぎ去りし昔時の時代を懷へば、彼等は面々相對して神と自然とを視たり。然るに我儕は彼等の眼を通じて、僅に之を觀るのみ。何が故に我儕も亦彼等と同じく、宇宙と純眞なる關係を有つこと能はざるか」と。然り吾も亦此の激昂を懷くと切。何故に我儕は宇宙と純眞なる關係を有つこと能はざる乎。「古」何處

にある「未來」何處にある。吾只此の宇宙に立つ。希くば裸體にして立たしめよ。

凡ての妄想よ去れ、宗教、政治、文學、歴史、國家、民福あらゆる言語の名稱の世界よ去れ。有名よ去れ、無名よ來れ。凡てのもの吾より消えよ、只一つのもの來れ、然り吾只活ける關係を以て此天地と此生命とに對せんことを希ふ、只希ふ、火を以て燒く能はざる、世界の凡ての王冠の山を以て代ゆ可からざる只一つの信仰を希ふ。吾は迷ひ吾は苦しみ、吾は縛せらる。吾人間の薄弱と無智と暗黒のうちにもがく。天の光よ。雷の如く吾が靈を刺せ。



「見よ其處に地獄を見たる人行く」フェロナの民はダンテを指して言へりとぞ。是れ君も嘗て聞き給へし逸話なるべし。吾實に此のうちに極めて深き意味を感ず。ダンテの世界は決して想像、批評、傍觀の世界に非る也。確信の世界也。カーライルの語を翻して言へば、吾等が北に酸する時必ず北海道に至るべしてふ小信念よりも更に強き信念を以て此の不思議なる宇宙の滅せざる眞を見たりし也。吾實に之れを疑はず。人間眞髓の靈は必ず此の如くなるべしと信ず。故に顧みて自らの朦朧を痛悲す。

月の美は吾をして美の力を感せしめざるに非ず、然も雲間に出没し暮潮に浮動し、寂流に金波を照らすが如き

は殊に吾が心底にそゝがれたる美の靈光なり。而も吾が心靈の朦朧は依然として朦朧なり。嗚呼爰に於て美何の力ぞ。

故に余は活きたる關係を宇宙にたもち、眞の信仰に立つ詩人に非ずんば詩人とあがむる能はず。只美と稱し少しく之れを感ず、之れたれにもなす處なり、彼れは人間なれば也。されど爾果して美を信する乎。余は自問自答すると同時にかの詩人なるものにも亦此の間を發せんと欲す。

余は未だ美を信するに至る能はず。嘗て信じ得しと信じたり、されどこれ謬なりしをさとるぬ。余が情は時に



激昂、時に感覺す、而も統一なし。

余此のごろ湖處子の著、ウオーズウオースの傳を讀み、深く眞詩人と空詩人との由りて分かる、處を感じぬ。

ウオーズウオースは眞詩人なり。湖處子は空詩人なり。

余は此の如き空人物に由りて此の眞詩人が吾國に紹介せられたるを残念に思ふ。

二十六にして詩人たる可しと決し、七十四にして詩職に就き、其の長き生涯、然り殆んど全生涯の間、世より捨てられ、冷笑せられ、罵言せられて而も、偉氣昂然として其の天職を把持したる事實、是れ常人が不思議と思ふよりも更に不思議の事實に非ずや。而して湖處子は何

故に此の眞詩人がよく此の不思議の事實をつくり得しかの點に付ては少しも説く處なし。否な、彼は説きたる積りならん、されど實は彼決して説き得ざる也。

湖處子はウオーズウオースの信仰の主觀的自白をば生意氣にも排したり。

人間明確なる信仰なくして浮世の上に立ち得ると思ふか。人生の説明が出来ると思ふか。否岩をつんざくの水、必ず止むを得ざるを知らずや。

然れども湖處子の曰く、

「逍遙遊を讀む時は時として非常なる自然の美を感ずることあるも、其哲理其の人生觀は夫の目に入らんとする



飛鳥の如く、絶えず眉間に纏綿するを見る」と、而して曰く、「余は獨り渠が哲理を棄つるのみならず。其人生の理想すらも抛ち去る直ちに余が無意識に對せんことを欲するものなり。」と。

友よ、吾此の如く空人の寢言を引證する時、吾がもらさんと欲する噴火猛炎の徒らに激するを覺ゆ。吾に批評家の忍耐なし。

湖處子には自家の田園的趣味を以て此の自然の詩人を料理せんとはする也。彼は全然ウォーズオースを知る能はず。尺度虫の富岳をもさすが如し。よし自由に此の無血虫として動かしめよ西天の水光は是れ大日の餘光な

り。吾之れに對して哀感す。山林の炊煙は生民の平和なり、吾是れに對してたしかに心の平和を感す。寂寞の山林に孤鳥を聽き、幽谷の樹蔭に水語をもとむ、人たれか心底自から流るゝ自然的幽寂、平和、同情、哀愁の感なからんや。此の點よりすれば吾も亦た湖處子と共にウォーズオースの自然的詩句に隨喜せずんばあらず。されどウォーズオースを以て只だ此の如き人間一種清感に安じて、八十年の生涯を獨立獨行せりと斷するが如きは、殆んど神と人とを知らざる處行なり。

ダンテは地獄を見たり、故に無獄を書き得たり。カーライル曰く、ダンテの地獄、鍊獄天國は此の宇宙に對す



る彼の信仰の表象的再現なりと、「此の宇宙に對する彼の信仰。」

然り此の宇宙。此の人生。是れ最初最確の事實にして人心の眞實なる、必ず信仰の靈火をもとめずんば止まじ。

マシユールノルド曰はずや「人生は詩人の最大疑問、人生の批評は、詩人の最大事業、ウオーヅウオースがセキスピアー、モリエル、ミルトン、ゲーテの如き不世出の詩傑の班中にあるものは、其の人生觀の高且つ崇なるによらずんばあらず」と。吾が思ふ處も此の如し。

哲人の求むる處は信仰なり。眞人のもらす處は信仰の火のみ。此の無限の天無窮の時此の生命其のもの、是れ

最初の事實なり。詩人何をか感じ何をか語る。只だ時に場合に月に花にをりくふれ來りて一片の涙を誘ひ出すを以て得たりとなすべきか、此れ湖處子の徒が隨喜する處にして、天のうちに地の上る此の生命を驚異痛感して立つ人間の安する能はざる處。」

ウオーヅウオースは何と言ひしぞ「人間に付て、自然に付て而して人生に付て寂寞の境に瞑想し」と。實に然り。嗚呼實に然り。人間を瞑想し、自然を瞑想し、人生を瞑想す。自然を忘れて人生を思ひ得るか、人生を忘れて自然に何を感じすべき。吾自然のうちに在り。吾自然より來りて自然に歸る。戀も自由も凡て自然のうちに在



り。如何に此の自然の生命を送らん。失望、驚異、煩悶、  
 焦慮、而して哲人は確信を掴む。茫々たる大海に岩を得  
 たる流人の如し。ウォーヅウォース曰く吾は思考する人  
 と語らんと。

ウォーヅウォース豈に漫然として夕の煙に對せんや。  
 漫然として只小兒は大人の父なりの奇語を造作せんや。  
 彼は詩人てふ名稱の奥に人てふ實を有す。其の感情は信  
 仰の眼を透し燃えたる火のみ。

「我が詩の世にある間、徳義、眞理、少年の伴侶たらん  
 ことを望み得るは深く満足する處我名の如きは毫も記憶  
 せらるべき要あらず。一葦舟を棹して無窮永劫の海に渡

らんもの、何時まで、岸より見られんとするや」と。ア  
 あ無窮永劫の海、此の大自然！ 詩人の忘れんとして忘  
 る、能はざる處は實に只之れ事實のみ。無名の草花の美  
 も只此の大事實に、動きたる心を動かしたるなり。ウオ  
 ーヅウォースは美を信じたる也。凡て高貴の詩人哲人皆  
 然り。

詩聖哲人皆此宇宙と此人生に對する信仰を有し、之れ  
 以て其の感情思想を顯す。故に自由に、故に強健に、故  
 に惑はず、獨立獨行信仰して立つ。吾實に之れを疑ふ能  
 はず。

余として最早此の如き批評的言語に吾が心の徒勞せし



む勿れ。余は批評を好まず。最初吾に約束せし如く爲す可きは只順序と形式とに頓着なく、吾が感想のありのまゝを打出すにあるのみ。

余は何者をも願はず。嘗て政治上の功名を願ひき。嘗て文章の名の雷鳴の如く轟かんことを欲しぬ。欺く勿れ。今とても然り。吾が燃ゆる情は虚榮の血に昂る。されど神よ希くば照覽あれ、吾決して虚榮を虚榮と知りつゝ之れに焦がるゝものに非ず。

されど人間は弱し、先入の塵世の衣は吾が赤兒の目に於て已に吾に投げかけられたり。日又月、一年又一年。衣は肉となり、肉は心となり、吾が本心の光終に此の地

の力の支配の下に埋没せられ了りぬ。  
されど吾が本心は決して此の虚榮を希ふものに非ず。  
否、吾が智は虚榮の虚を見たり。

吾は幾度も繰り返し曰ふ、吾何ものをも願はず、只信仰を望む。嗚呼信仰の來りて此の薄弱にして愚かなる靈を救へ。

信仰は自由なり、光明なり、美も始めて美に、善も始めて善、凡ての生命の源、人生の根本、神の唯一の賜なり。あゝ信仰、然り此變轉し、循環し、生滅し、寂として燃え、悠として流る。宇宙の心として美と善と愛と信じ得るならば如何に吾は幸福なるべき。然り信仰吾れの



凡てと生命を捨てん、只此の信仰よ來れ。此の如き信仰に充たされたる賢哲は羨むべき哉。暗黒と偶然と先入に支配せられて或は苦悶するもの、或は、苦悶すらも爲さざるものは、宇宙最大のあはれなるものに非ずや、然り吾も世も滔々皆是れなり。

救世、ア、何をか救世と云ふか。

願はくは世を此の暗黒より救へよ。

不思議なる哉吾が心。

若し冷然たる言語を以てすれば、吾が選ぶ可きは二者の一のみ。曰く、天地に大道存し大道は神より出で人は之れ信じ、愛、美、善、とを永久の眞なることゝ信すべ

し。曰く、天地只盲動の暗黒のみ。人は愚、惡、迷の肉塊のみ。空より生じて空に歸す、其の間みだりに轉々、喋々、齷齪す。

此の二者のみ。光、若しくは暗。二者必ず其の一なり。然り若し冷然として言語の判断に従へば。

不思議なる哉。吾が心。此の二者の一を信する能はず。吾が心は其の一を確信する能はざるなり。是れ眞に不思議に非ずや。

道路二岐に分る、吾が足其の分點に立つ。右に可きか、左に可き乎。右すべくんば右し、左すべくんば左す。決する能はずんば躊躇す。凡て此等の舉動は極めて明白な



り。

然るに天地人生の意味を考ふる時に於ては、人心の不思議も亦甚しい哉。光明か、暗黒か、右か左か。否否、不思議なる哉！吾が心は其の何れをも選ばざるや。然らば躊躇し苦悶す可きか、否否、躊躇も苦悶もせざる也。懸崖の上を歩む。深淵足下に蒼たり。路帯よりも細し。橋丸木よりも危し。心期せずして戦のく。胸自からにをどる、足自からに振ふ。

然り、然るにありのまゝに言へば、吾が心は未だ光明と、暗黒とを選ぶべき必然の地位に立たざる也。吾は只空言する也。只論理を試みるのみ、只口まねする也。上

只空、只寞、日より日、其の動物的生命を驅るのみ。自然の見、天來の兒に非ずして、先入、習慣、情力の見のみ。選擇信確の必至の結果もなく、又躊躇苦悶の因縁もなし。

吾たゞ信仰を絶叫す。されど信仰の來るべき筈なし。信仰は中心自然に燃えよる神秘醇粹なる靈に賜ふ唯一の賜なり。彼の頭直ちに此の蒼空を仰ぎ、彼の心直ちに此の天地に觸れ、彼の情直ちに此の人生に動く。信仰の光始めて電の如く來る。中なる靈の火猛然として燃え上る。夫れ此の如し。吾に信仰の來るべき筈なし。何となれば吾が日々住む世界は是れ自然の世界に非ざれば也。日本



外史、三國史、西遊記、食物、衣服、學校、新聞紙、日本、支那、西洋。吾が住む世界は此等種々雑多のものが小兒の時代より吾が感想を取り圍みて作りたる世界なり。吾が頭は蒼空に向へども、此の蒼空は此の感染的世界の天となり、吾が情は是の人事に接すれども、是れ又此の感染的世界の人事なり。

吾が心は朝鮮事件に感動す。則ち太閤秀吉、外交問題、東洋の大勢、支那人の馬鹿もの、吾日本の光榮等の觀念が作りたる世界の住民の一人として感動するのみ。一點の微草の花も天地の心を示すてふ世界、之れ吾が夢にも知らざる世界。只是れウォーヅウォースの詩卷のうちよ

り傳唱して、中なる心僅かに之を和するのみ。故に吾が見る太陽は此の詩人の見たる太陽とは異なり。故に吾が住む世界はクリストの住みたる世界とは異なる。

故に吾々信仰の來るべき筈なし、吾たト育動するのみ。疑問もなく直感もなし。

而も吾信仰を絶叫す。何故ぞや。一點の靈光吾を射ればなり。エマルソンの曰く。

Our faith comes in moment ; our vice is habitual.

Yet there is a depth in these brief moments which constrains us to ascribe more reality to them than to all other experience.



吾人の信仰は、時に來り、吾人の不徳は、習慣的なり。而も此等の時々のうち猶ほ深遠なるものありて存す。是れ吾人をして凡ての他のあらゆる經驗よりも更に眞實なりと認めざるを得ざらしむるものなり。

吾更に此の言を以て名言なりとす、吾實にしか感ず。吾豈に全く感染的世界、先入的世界、説傳的世界にのみ住せんや。否否、吾若し全くかくの如くんば、いかで此等の言を爲すを得ん。吾にして若し一點眞實裸體自然世界の光を認め得ずんば、如何で先入感染、傳説の世界を顧みて呪咀するを得んや。

あゝ吾々時々一閃の電光に打たる。夫れ只時々なり。

然も吾是れをえてたしかに靈性の、深遠なる生命となす。吾をして此の時々電光をだに信せしめよ。然り吾が心の底の聲は曰く。然り信すと。故に吾更に全き信仰の天光の吾を全被せんを希ふ。彼の太陽の光が此の地球を包むが如くあらん事を希ふ。蔭！ 恐るに足らず。「光あらしめよ」。蔭もなし、光もなし。朦朧として浮動盲轉す、是れ靈魂の地獄にあらずや。

何をか時々電光と云ふ。時々吾が心の心を打つものとは何ぞや。吾をして信仰！ と叫ばしむる信仰のはしは何ぞ。

或時は自然に接して起り、或時は讀書して發し、或時



は瞑想して生じ、時々は突如として場處を選ばず、電光の如く落下し來る。

思ひ思うて心疲勞し、惑ひ惑うて情倦憊し、此の身只紛々擾々として喧びすしき世界繰り返し繰り返す萬變一律の生活場裡に驅役せらるるを感じる時は、吾が生命是れ只吾に重荷の如し、希望もなく満足もなし、さりとして不平あるにあらず、束縛を感じるに非ずと雖、只夫れ希望もなく満足なし、故に此生命の極めて懶きを感じず。かゝる時に天地眞に無義、生活眞に空、何故に犬の走り、鶏の鳴き、風の柳葉を動かすかを疑はんとす。父母！ 何の意義なく、朋友！ 此れ空世辭、情もなく涙もなし。

甘くもなき辛くもなし、精神の呼吸全く止む。只血管に動物の血、其の意味なき循環をつとくるのみ。

吾若し余りに永く天地を忘れ、ひたすらに此地上の生活社會の取引きにのみ心を用ひたる時の結果は則ち此れなり。

されど吾が鬱勃の靈何ぞ此の泥沼無風の如き王國に永く止まる可き、吾が心は此の永劫眞窮に活動して止まざる大宇宙に轉じ、顧みて此の吾が生命其のもの、眞實なるを痛感する時、叫ぶ。心の心の底の聲は叫ぶ「然らば吾たしかに此の宇宙のものなり、吾たしかに茲に生く」と。是れ不朽なる靈魂の聲にあらずや。



湖處子のウオーヅウオス中に一節あり、「渠は厭世の人となりて愈々安する能はず、最初の前提を最後まで把持し來りて、自然の疑問を解して自ら慰藉せり。曰く、「宇宙の愛暖の、美力なき時に於ても猶ほ較著なる永劫の法、以て頼るべきものなきにしもあらず」とこれ湖處子は輕に記し去りたるものなり。

されど吾は深く此詩亦吾と等しき經驗を踐みたるを思ふ也。先づ此の宇宙の永劫の界！ 而して吾が命たしかに此の宇宙に在り、是れ事實なり。此の事實を痛感する時に吾が生命の生命を感ず。

是れたしかに信仰の只第一步にあらずや。吾實に其の

如く感ず。吾は是れを以て不朽なる靈魂の聲なりと信する也。

かく信する時に於て、言ふ可からざる、希望を感ず。力を感ず。故に慰藉を感ず。

嘗てカライルのゲートの死てふ文を読み、左の句に出遇ひぬ。

——; Life itself seems holier, wonderful, and fearful.

生命其者こそ更に神聖に、且つ驚くべく愈々畏るべきを見る也。

吾此の句を読みし時、一種の戦慄吾が心魂に行き渡りたるが如く感じぬ。此の句こそ吾が胸中三四月の鬱勃を



更に一段の光明に導きたるものなり。これ吾がたしかに感じてしかも洩し能はざりし處の句なりしなり。

嗚呼吾一度び生命其のものを此の宇宙永劫の法界に痛感す、更に進んで其命其のものをこそ神聖なる意味をたへ、愈々驚く可く愈々畏るべきものあるを感す。是れ實に吾を更に一步宇宙の神聖者に近かしめたるものに非ずや。

「嗚呼此神聖にして驚嘆すべき生命そのもの」吾此の句を叫んで愈々無限の感想に打たる。吾始めて天地そのもの、神聖を感じ、吾始めて吾其のものを見出したる如くに感す嗚呼これ大なる慰藉に非ずや、深立なる光に非ず

や。吾は最早習慣其のもの、有にあらず、時代そのものの有に非ず、政治宗教文學其のもの、有に非ず、浮世の妄想の兒に非ず、眞に天の有、永久無窮なる神其の人のものなるを感せずんばあらず。嗚呼これ天の自由を冥想し得たるものに非ずや。

吾は煙となり土となりて消ゆるものに非ずして、吾とは神聖なる天に屬する不朽の靈なることを感せずんばあらず、嗚呼是れ靈が先づ地上の勢力を破りて擧げたる勝利の聲に非ずや。

今井君足下、余は前に言へり、「時々の電光」と。嗚呼只夫れ時々なり、決して永續に非ず。此の生命其のもの



を痛感し、此の不思議の宇宙にありて吾が生命其者の如何に驚嘆す可きを感じると、是れ決して余の常經の感想に非ず。余は未だ習慣先入の衣を脱する能はざることは前已に之れを言へり、故に、此等の直感も只電光の雲を劈て落下するが如く、一閃、二閃、彼の時、此の時、吾が心靈の暗黒を直射するのみ。

而も言はずや、此の時々のうち猶ほ凡ての日常先入的反復の經驗よりも吾をして更に深遠なるものを感じしむと。然り故に余は此の電光を信ず。夫れ然り故に凡ての先入習慣の世界を脱出して、全然、天火の信仰世界に入せんことを希ふ、曰く信仰來れと。

嗚呼信仰！ 余は只々之れを叫ぶ。

人は自由の兒、自然の兒なり。

意識せらるゝ丈けの度に於て先づ十分之れを意識せよ、然り吾實に然か感ずる也。

故に吾より以前に生れたる人が、踐みたる跡を模倣するは之れ愚の極なり。

吾が頭は直ちに無窮に天に接し、吾が眼は獨歩して此の蒼天明月に對す、吾が生は吾が生なり。個人の意義の奥妙はこれのみ。

故に生にして空なりと知らば、自殺すべし。是れ尤も自然的の行ひなり。決して前人の跡を見てあきらむるに



及ばず。但し生の意に大信仰あらば決然其上に立つ可し。  
又前人をまぬるに不及。

故に曰く信仰よ來れ、然らずんば吾常に模倣追跡の束縛を感ず。

凡て吾に在るもの去れ。富も(ありとすれば)去るべし。名も(ありとすれば)去るべし。希望も(ありとすれば)去れ。喜樂も(ありとすれば)去れ。妄想よ去れ。空想よ去れ。凡て去れ。愚なる智識よ去れ。偽りたる誇よ去れ。凡て去るべし。

然り信仰あらぬもの去れ。吾をして盲動せしめ吾を束縛し、吾を充塞し、吾を迷はすものよ去れ。

然る後、吾始めて眞の自然の兒となつて信仰に充たされん。宇宙、眞理、神、愛、美、凡て吾に在りて空言なり。

吾は疑もせず、信もせざる也。

爾眞に疑ふならば眠る能はざるべし。

爾眞に信する處あらば山をも移すべし。

而し吾實に何れにてもあらぬなり。

愛、美、善是れ天地人間の心か。此の上時間の生命は幻か。

「神聖」「暗黒」何れぞや。

吾は斷々乎として神聖の愛と美と善とを信せんと欲す。



吾が心は實に斯く感ず。

嗚呼永遠窮みなき此の宇宙に此の人間！

嗚呼誰れか「神聖」を疑はんとするぞ。

爾は神聖を疑ふに非ず。未だ自家の生命を此の大自然のうちに見出さざる也。

嗚呼憐れの人間よ、更に光明、更に信仰を指させ、信仰これ智識也。吾實にしか感ず。何となれば信仰は心の光を意味し、心の光は則ち智識あればなり。

天を仰て呼ぶ、愛何處にある、善何處にある。光何處にある。

内に省みて呼ぶ、何處にある。凡て何處にあるぞ。

あるなるべし。

吾をして山を移すの信仰に至らしめよ。

ダンテの信仰を如何、ルーテルの信念を如何、省みて近代的妄想を見る、實に之れ水上の藁の如し。水上の藁の盲目的舞蹈よ亡びよ。

天下の人、悉く無信仰に安じ能ふとも吾は能はず。凡て生れし凡ての人、之れより生るべき全數の人、悉く無信仰に生き能ふとも吾は能はず。能はざるを誇る。

あらゆるもの吾より去れ。只信仰よ來れ。之れ命なり。地上の人悉く望む處まち／＼なり。吾は只信仰の火を希ふのみ。」



以上は「欺かざるの記」の一節なりとす。是れ亦電光的直感の一闪に非ずや。余は此の一闪のうちに信すべき深遠を見る。

悠々たる哉、人生。自由なる哉、淳朴なる山林の生活。

嘗て麻郷村に在りし時、時はあだかも秋の初めと記憶す。落暉猶ほ高樹の頂に點する頃、獨り微吟して吾が山家を出でぬ。吾が當時の山家の如何に寂寞の境にありしかは已に屢々君に語りたる處なりと信す。

高叫山は本名、高塔、一小丘に過ぎず。朝暾を迎へ、夕陽を帯びて登臨する毎に思はず高く叫ぶ。満目の好景は實に叫ばざるを得ざりしが故也。遠き村、近き森、其

の眺めは或時に悲しく、或時に面白し。雲霧四面の山野を壓して流るゝ時に、吾獨り此の頂に立て默想し、悲歌し、壯吟したる事幾度ぞ。此等の事は當時しばしば君に報じたる處なり。

さて吾門を出で此の高叫の山麓に到る。例の如く空想より空想に驅られつゝ灌木の蔭を逍遙せり。

時に耳を打つ一連の歌聲あり。聲は山の頂に起りぬ。吾仰ぎ見れども人を見ず、只聲を聞くのみ、聲は山頂の夕陽のうちより起れり。夕陽は靜かに姫小松の上に點じぬ。

吾此の歌に打たれて、空想夢の如く消え、身は寂寞の



中に立つを感じぬ。則ち丘を登りて聲の起る方に至れば、二童子あり。松の蔭にうづくまりて枯葉をかき集め居たり。彼等相顧みて頻りに歌ひぬ、吾が近づくを知らざるものゝ如し。

吾靜に此の歌を聞きつゝ、四方を見回せり。夕陽今將さに消えんとして消えず。薄暮は已に蒼煙を遠林の陰に上げたるもあり。秋空蒼々として天外に白雲をまき。悠々たる大日寂として西に落ちなんとす。

可憐の聲、寥々の調、無邪氣の笑聲にまじはりて、猶止まず。嗚呼誰れか此時の吾が感を明かに描寫し得たるぞ。

空想、野心、虚榮、煩悶の吾俄然として亡び、質朴謙遜、同情の感、涙と共に心の底の心より湧出し。吾身樵童の如く吾が身夕陽に立つ孤松の如く、吾身天外に卷く白雲の如く、吾は太古の天地に導かれたるが如し。

嗚呼人間！此の地上に最も天に近き自然の生活の精神は實に茲にあらずや。此の小童の歌聲のうちにあるに非ずや。此の夕陽のうちにあるに非ずや。嗚呼醇朴の生活！信仰と自由と健康と満足と眞の偉大は此れに在り。吾之れを之れ痛感す。

天地別に人間ならぬ世界ありて存し、此處には秋の日光も一段あきらかに、春の花も一段露をおび、川の流も



更に自由に流るゝ心地し、鳥も吾が爲めに友となりて啼き露も吾をのせて遠く彼蒼に卷く。嗚呼是れ實に別天地に非ずや。

今井君足下、此の如き經驗は吾まあまりて殆んど數ふべからざる程なり、雪の夜の山家に在りて幾度か此の感に熱涙を注ぎ、讀書と空想とに倦れたる時、突然菜園のうちに起りたる小女の歌聲を聞きては卷を投じて泣きたる事もあり。哲學、宗教、政治、文學、科學滔々として「文學の世界」が經營する處のもの果して何ぞ。嗚呼人間の自由、天真、信仰の生活これ措いて外に何を目的とはする。

凡そ「山林の生活」「田園の生活」てふありふれたる空詩人の妄想は、其の實、彼等が一種の田園的趣味を以て遁世的逸樂的に解釋するよりも更に更に眞實なる尙深遠の意味を有す。市府の喧嘩に疲れて山林の寂寞を希ふが如きは、元より人心自然の妙用に屬すると雖、未だ樵夫の歌聲のうちに、天の自由と地の生命と一致せしむるが如き高遠の憶を冥想したるものに非ず。

嗚呼天の自由。人は地の生命を有するが故に多の束縛を受く。故に地の生命の爲方に就ては最も其の選擇の自由を有せざる可からず。爾は尤も人間生活の眞と信する仕方に由りて、尤も眞面目に生活せよ。



神を信じ、自由を信じ、自然の美を信じ、人情の愛を信ずるものに非ずんば、眞の山林の生活に安ずる能はざるべし。

夢想して空歌するは易し、眞感して満足するは難し。

今井君足下、是れ亦た吾が電火の一閃なり。吾此の一閃のうち無限の意味あるを信ず余をしてナポレオンの帝座に萬國の金冠を專有せしむるよりも、余は心からして此の夕陽のうち樵童と共に自由に高歌せんことを希ふ。

嗚呼天！ 是れ自由なり。天の自由！ 天の自由！ 吾れ實にかの小民無名 草間に眠らんことを希ふ。小丘の麓、灌木の蔭、天の自由は恐らく茲にあらん。

嗚呼哲人何所にかある。嗚呼古聖人何處にか逝きし。是れ實に發せざらんと欲して發せざるを得ざるの問なり。是れ實に吾が心靈の止む能はざるの痛嘆なり。

嗚呼此の歌聲。或は人家はなれし森の蔭に、或は河流の岸、平家の裾、回顧人を見ざる處、或は茅屋の傍、夏の日天に中する時、或は秋のすえ、落日靜かに枯葉に落ちるの邊、幾千幾百の少年、少女、老翁は何れの處にか此の歌聲を擧げなん。古代の彼等は今見る可からず、今の彼等は又何時か其の血肉と共に眞の歌聲を止めん。されどされど。吾は是の歌聲のうちに言ふ可らざる敬虔の念を感せずんばあらず。



吾をして我儘なる聲を叫ぶの極めて淺間しきを教へ、悠々として靜天に向ひ、黙々として神聖に對し、超然として無窮に感嘆せしむるものは實に此の歌聲にあらずや。神の世界に人間の住む有様は様々なり。或一派の人は彼の山林の生活を目して、放逸なる、狹隘なる、主我なる、隱遁する生活となして、自家の生活を誇りて、歴史を有し、事業を有し、義務を有し、公共にして大なる生活をなす。吾も亦實に斯く感じたり。成程吾が生活は文字の世界、新聞紙の世界の生活なり。文學、宗教、哲學、政治の披論せられ、名譽と不名譽の競はる、世界なり。吾も亦之れぞ眞の人間の世界にして、彼の山林、鳥裡、田

舎の生活は之れつまらぬものとなしたり。されど之れ實に先入の道なる感情のみ。神の世界に人間の住む有様は持々也。神は凡ての人の頭上に在り。日は凡てを照らす。雨は凡ての上に降る。人間は自由の生活すべく作られたり。されど吾は彼の愚かなる先入の感情を持して、文學の世界に束縛せられ、彼の世界の外又人間の住むべき所なきを感じ、如何に自ら壓塞せられしよ。之れ實に愚なる事なりき。かの世間の少年は妄想虚榮の夢のみに日を送り勝なり。かくて吾も亦自ら其の少年の一人なりき。而して吾今此の歌聲に打たる。



今井君足下、吾が友古川君は逝きぬ、君と余とは確かに彼と寢食を共にしたり。前途の希望を語りたり。さまさまの事業を企てたり。互に書を送りたり。嗚呼是れ決して夢に非ず實に君と余が親しく踐行したる事實なり。嗚呼彼は有たり。

而して吾が友よ。今や彼何處にかある。嗚呼何處にかある。嗚呼々々何處に彼は逝きしぞ。半夜夢半ばにして突然彼を懷ふ。彼が俤はありくと吾が眼前にあらはれ來る。見よ天地寂々たり、而して彼は遂に有らぬなり。

嗚呼是れ恐ろしき事實に非ずや。

大哲人何處にか逝き、哲人何處にかある。

吾が敬愛するカーライル、吾がウォーヅウォースよ。卿等凡て何處にかゆきし、卿等の書籍は確かに茲に吾が机上に在り。卿等は嘗て之れを書きたり。卿等の血の肉ある心ある健腕、嘗て鐵筆を振うて此の一字此の章此の節を記したるなり。卿等の信じたる處何事ぞ。卿等の説きたる處何事ぞ。

嗚呼不死！ 卿等は實に不知を説けり。見よ天地悠々たり而して嘗て不死を説きたりし卿等何處にある。卿等の靈何處にかある。卿等の信じたる宇宙の大道何處にある。見よ見よ嘗て卿等が仰ぎたる蒼々の天、今實に吾が頭上に蒼々たる也。而して卿等は呼べども答へざるな



り。見んと欲して視る可からざるなり。

嗚呼不思議にして恐ろしくもある哉。此の神の世界！

卿等は實に死せざるなり。吾友古川君は決して死せざる也。余は實に卿等を此の不思議なる宇宙の外に消えたるものと思ふ能はず。又卿等の肉が土に歸したると同時に此の如く確かなりし人心の生命が、全く無に歸したりとは信する能はざる也。余は卿等を強く懷ふ程、愈々卿等の靈の生命を信せんと欲す。

嗚呼不思議の世界！ 卿等は不思議のうちにかくれぬ。吾は如何、吾は如何、吾は人なり、人として確かに此の不思議のうちに生命を保つ。生命のうちに此の不思議

議中の不思議なる自信自覺する心を保つ。

吾は消えなん。然らば凡ての人、生ある人悉く消えなん。人類は無に歸せん。無より出でたる生命の心は遂に無に歸せん。

嗚呼果して然るか。果して然るか。

否！ 否！ 吾は叫ぶ否！ 吾は如何にするとも地上の連続の人類の行動にのみ安する能はず。靈！

嗚呼！ 靈！ 神よ、吾をして今茲に光あらしめ給へ。

He thinks he was not made to die ;

And thou hast made him ; thou hast just.

テニソン、カライル、ウォーズワース、古川君、卿



等吾を見ん。卿等神に在り。神はホールなり、正なり、永遠なり、命なり。吾之れを思ふて吾が心躍る。月よ！至大なる哉。蟲聲も亦吾と共に在り。神のものなり。

### ワーツワースの自然主義と余

余の如き實に言ふに足らず、余の如きが自然主義者であらうが、あるまいが、問題にもならないことでそれを自から彼是れと言ひ出すのは鳥澁がましき至りなるが、本誌の新年號に於て島村抱月氏の『文藝上の自然主義』てふ有益なる論文中、「主義と名のつかぬ自然主義は早くイギリスのワーツワースに端を發し」とありて、余をしてさてはと思はしむ所あり、従て本誌上に於て二言三言述べて見たくなつた次第である。一つには亦、昨年秋



『日本』新聞紙上に於て余と自然主義に關して多少自から説く所があつた其行が、りからでもある。

『日本』新聞紙上に於ての余の所説を一括して言へば、「余は評壇から自然主義者なりと目せられて居るけれど、余自身從來の作物は、自然主義なる者の如何も知らずとて只だ余の見る所、信ずる所に依りて製作せる者である」との意に過ぎない。

余は同紙上に於て、これより以上の事は何も言はなかつた。則ち「余の見る所、信ずる所」の其本源に就ては何も言はなかつた。

しかく徳川文學の感化も受けず、紅露二氏の影響も受

けず、從來の我文壇とは殆ど全く没關係の着想、取扱、作風を以て余が製作も初めた事に就ては必ず其本源がなくてはならぬ。其本源は何であるかと自問して、余はワーズワースに想到したのである。然も尙ほ余はワーズワースが果して文學史上、自然主義と何程の關係を有し居るかなどの攻窺はしなかつた所が、本紙上に於て計らずも島村氏の、先に引いた言説を見て、さては余も遂にライダルの谷間から流れ出た自然主義の流を掬んだのかとうなづいた次第である。

余が初て短篇小説を書いたのは今より十年以前である、それより更に五六年前余は覺束なき英語教師として



豊後國佐伯町に一年間滞在して居たが當時余は最も熱心なるワーズワース信者で、而てワーズワース信者に取りては佐伯町は實に満目悉くワーズワースの詩編其物の感があつたのである。山に富み溪流に富み、溪谷の奥に小村落あり、村落老て物語多く、實にワーズワース信者をして「マイケル」の二三は此處彼處に轉がつて居そうに思はしめた位である。斯る場所に在て日夕ワーズワースの詩編に夢中になつて居た余が如何程までワーズワースの感化を受けたかは當時の余の「日記」が説明して居る。今其の二三條を引く。

人若し我に向て汝が文學者詩人としての目的は何ぞ

やと問はゞ我れ答ふるに窮せざる也。

曰く此獨立の靈ソールが知り能ふ丈け、觀得る丈け、感じ得る丈けをありのまゝに筆にのぼすにあるのみ。

然り余は獨立にして自由なる一個の靈ソールなり常に自由に觀、自由に感じ、自由に現すべし。

□

事實ありて意味あり、空想は意味に非ず、人生の意味は人生の事實の語る所なり、事實によりて意味を直覺する是れ靈妙なる人間の靈の妙機に非ずや、詩人は是也。

□



多く見たり、多く聞きたり、思へば此等の事實悉く  
深き意味ある哉。

東氏の雇人爲(人名)の兄なる藏は盗みて獄に入りぬ  
石崎氏にごろつき居たる徳は盗みて獄に入りぬ。

○○○、○○○○、○○○、○○○、○○○、(悉く人名なれ  
ど生存者なる故に秘す)其人物、其經過、其經歷。

□

一個人を深く能く観ることは、あらゆる歴史を見る  
こと也、あらゆる宗教を見る事也、あらゆる詩歌を  
見ることも也。

以上は明治二十六年十二月二十日より末日までの日記中

より抜いた者であるが其後一年餘り過ぎて余は、自から  
何を書かんと試に題材を撰み記したる者を見ると

◎芳島と女島との間の渡守り。

◎女島にて見たる水門を下せし若者。

◎船頭町より木立村の間を渡す舟子。

◎十二段(山名)の山腹にて逢ひし老樵夫。

◎こじき紀州(人名)

而て「日記」の一節に曰く「余は此の一個の人間を思ふ時  
は同情に堪えぬなり」と。以て如何に深く余がライダ  
ルの詩人に動かされて居たかと解るだらうと思ふ。

既にワーツワース信者である限り、余は自然を離れて



たゞ世間の人間を思ふことは出来なかつた。人間と相呼  
應する此神秘にして美妙なる自然界に於ける人間なれば  
こそ、平凡境に於ける平凡人の一生は極めて大なる事實  
として余に現はれたのである。

其處で豊後に滞在後五六年の後余は初めて源叔父なる  
小説を作り其主人公の一人は乞食兒紀州であつたのであ  
る。

無論余は後年ツルゲネーフも読み、トルストイも読み  
モーパッサンも嚙りて其感化を受けたには相違ないが、  
以上の所説に依りて余は遂にワーズワースの流を掬んで  
それを信じて、それに依て立つた一人たることを證明し

て餘あると思ふ。

然し今日我文壇に於て説かれて居る自然主義及び所謂  
る自然派の作家が其作物に依りて示しつゝある自然主義  
と、ワーズワースの自然主義とは餘程相違があるやうで  
ある。少くともワーズワースは人と自然とを離して見る  
ことは出来なかつた。此不可思議なる大自然と人生とを  
別々にしては考へなかつた。然し今の我國の自然主義者  
には人あり人生あり、これ迄世間則ち社會の裡に觀るこ  
とはしても、人間に取りては最も大なる事實なる自然の  
懷に觀ることは爲ないやうである。

余は此點に於て今も昔の如く、而して今後益々ワーズ



ワームの一句

On man, on nature, and on human life

Musing in solitude,——

から離れたくないと願ふ、

悠久にして不可思議なる、生死を吐吞する、此大宇宙、  
爾が如何にもがきて飛び出さんとするも能はざる此大自  
然、事實中の大事實當面の真現象に就ては何等の感想を  
も懐かない文人が如何に巧に人間の事實を直寫したから  
とてそれは一藝當たるに過ぎない。斯くて文藝何の値ぞ  
所謂る自然主義何の値ぞ。

唯暗を見る

われに功名に心なくばせめても自由を得ん、わが情は  
居常刻々、功名に向て焦ちつゝあり、碌々として一生を  
人後に送り社會の下層に這うて過ごす事かと思ふ時は、  
全身の熱、火の如く燃ゆる心地す。わが眼よりは憤りの  
涙落ち、わが唇はわが前齒に噛まれ破れんとす。噫われ  
は何故に山民には生れざりしぞ、此世界は功名の舞臺と  
してのみは造られてあらぬなり。されどわれ等の眼には  
山河も此舞臺を飾る者の如くに思はれ、山に河に自然の



自由なる世界あるを容易に見る能はず。之れ詩的に感じ  
て而も實際的に此裡に生活する能はず、心は依然として  
功名の世界に惶々然と迷ひつゝあり、霸氣縦横一世を壓  
倒するの快事を夢み、治國平天下、一場のユートピヤを  
幻の如くに描きつゝあり。噫、われは何故に山民には生  
れざりしぞ。世界はたしかに讀書生の爲めに造られしに  
非ざる者を。

されど若しわれにわが功名の心を満足せしむ可きの自  
信あらばまだしもの事なれども、われに此自信あること  
なし、われひそかに吾が知人と吾れと比較し來るに、此  
點に於ても彼人われに優り、彼の點に於てもわれは其片

腕にも足らず。而して彼人は更に卓絶せり。われに何の  
取り處ありや、われに才力ありや無し。われに金力あり  
や、無し。われに深き學識ありや、無し。吾れに何者あ  
りや、成程細君、さすがの戀女房も此われを見捨て去り  
し事、無理はあらし。其眞と不眞、信と不信とを問ふ勿  
れ。今の女に此等の觀念を以て攻むるは無益ぞかし。實  
物を以て満足せしめよ。愛と信とを以てよりも、爾の才  
と學と金とを示せ。人の上に立てよ。新聞紙上に其名聲  
をかゝりかせ。さて顧みてわれに此等の者ありや、一も  
あることなし。細君の逃亡、無理もなきなり。われすら  
わが身、逃亡したきぞかし。噫、愚者中の愚者、罪人無



學者中の無學者。かくても功名とは生意氣ぞかし。小くなりて縁の下の力持ち位がなんぢの相應の事ぞかし。されどわれ果して能くこれを以て安んずべきか、わが心は自個を罵倒することに由りて、他人を罵倒したる時の如く、ラムネを飲みたる時の如くに心地よきか、否、否。Alas, the fearful unbelief is unbelief in yourself. Thomas Carlyle 憤恨と絶望の戰猛然として胸中に起り、此身と心と碎き去らんとす、噫吾もし困苦の人なるかな。されど困苦は少も自慢になり難し。苦む者は苦しむ者の損なり。御苦勞の事ぞかし、此の暑きに。日は東より出で、西に没す。東京の雨は横に降り、西京の雨は縦に降る。

爾の苦惱するが故に自然は其慣例を廢せぬぞ笑止なれ。ア、苦しむ者もわれ、われを嘲ける者も吾れ。實に望ましきは阿片ぞかし、酒ぞかし、もしくはピストルぞかし。何故にわれ明治〇年八月十二日に生れしぞ、何故に去年六月九日に彼女を得しぞ。惡むべきは十一月十一日なり。四月十二日なり。噫われ如何で、今年六月十五日午後八時、茶石の海岸に酔倒せざりしぞ。過ぐる夜、わが敬愛推尊する友人、わが許に來りて、わがなやめるを見て告げて曰く、腓立此書を読め、腓立此書を読んで希望と勇氣とを得よと。こゝに於て其夜も其翌日も、此一書僅に四章の文を繰り返して讀みて感じ



たり。されど要するに空勞に歸しぬ。ポーロに神あり、其獨子の信仰あり、此四章の文字を作る、もとより容易のみ。火あり、燃えざるを得ず、焼かざるを得ず、何の不思議あらんや。試みに吾をポーロならしめよポーロを我ならしめよ。われ彼の如くに語り、彼れ吾の如くに聞かん。實に望ましきは阿片かクリストか、兩者其一にぞある。われ著しクリストを以て此天地を作りし大能の神の獨兒と信じ、其罪の贖を信じ、以て神の深き愛を信じ、天にまします父よと心からなつかしく思ふこと、彼女を戀ふるに半ばにも至り、其愛の懷に此身を投ずることをよろこぶこと、彼女の膝に此頭を安むる喜びの三分の一

にも當り、此天地彼の三十六峯の美麗なる。山の數と、今頃の夜、大空の壯麗なる、星みつ宮、これ皆な人にしては吾等の兄弟なるクリストの父が造りしなりと信ずること、彼女を信ずることの五分の一にも至りなば、吾は其時、直ちに自由の人、勇氣の人、今日の日本、人多しと雖吾が前に其の平和と信仰とを誇り得る者なからん。卑陋なる功名の念を霞の如くに消え去り、我儘なる自家呪咀の苦は一轉して謙遜温良なるの心情の平和とならん。追懷の夢さめて希望の現實なる歡喜となるべし、われ凡て此等の解脱作用を知らざるにあらず、望まざるに非ず否、日も夜も、切願しつゝあるなり。然るに事實に



於て神よりも不貞不潔なる彼女戀しく、理に於て在まざる處なき神とは萬千億里の隔離あり、事實に於て四百里を隔つる彼女は夢にも現にも吾が眼前を去らざる也。吾等の罪の爲に其身を十字架にかけたるクリストの愛を信するよりも、吾を捨て去りし彼女の愛を尙も信せんと願ふ。凡て 等の事の如何に恥づ可く、如何に愚かなるを知らざるに非ず。されど吾が苦惱して措む能はざるは、かく知りつゝも、事實に於て此愚と恥の中に住めばなり。今は吾れ吾を攻め、戀人吾を捨て、智人、吾を嘲り、功名の念うちより身をやき、自個を信せざる失望の情をれと戦ひ、神の愛と義と其の孤兒の十字架を嘲り、貧窮

せまり疾病起り、世間には盜賊の如き大臣を見、偽善者横行し、虚榮の洪水は至る處、教會の中にすら汎瀾し、宗教は笑はれ、學者は利に走り、衷も外も吾身も社會も天も地もよろこばしき事、樂しき事、一點もあることなし。噫然らば吾も亦困苦の人なる哉、此の困苦よりわれを救はんものは誰れぞや。ポーロは曰く「是われらの主イエスキリストなるが故に神に感謝す」と、われは曰く「誰れもあることなし、故に益々困苦す」と。

此困苦の日に當りてわれに仰ぐ可く依る可く此心と身とを投すべき神と懐とあるなし。此故にわれ益々困むなり。われの苦みは此故に深くして刻なり。祈る可き信あ



る者は羨む可きかな。

われには何者もあることなし。嘗て此等の困苦の心を慰むる妻ありき。彼女と吾れとは相戀うて夫妻となれり。われは最後まで彼女を信愛したり。而るに今や彼女われを捨て去りて、われに遺すに樂しかりし日の追懷の苦惱と、世人に面し難き恥辱とを以てし、更に倍したる困苦の暗き底にわれを突入れて去りぬ。われに懷疑の苦あり、彼の日に於て此苦を忘れしめ、戀の世界に諸天の光を仰がしめたる者は彼女なりき。今や如何、今や如何。夏日来れり、之れ昨年の夏に非ず。雲蒸す山を見る、之れ昨年の山にあらず。尤も樂しかりし過去の日は尤も苦

しき咀の今日となり。而して神に見る能はざる懷疑の心は今も昔に替ることなし。然らばわれは困苦の人に非ざるか。少年の日も去り戀愛の日も去り、過去に追懷ありて前に希望なし、自己をも信せず、神をも信せず、然らばわれは困苦の人に非ずや。物質的の満足だもなし。否、否、寧ろ貧窮は夕暮の如くに迫りつゝあり。之れを凌ぐの用意も準備も何處に在りや。心は暗く、血は難まんとす、われ如何で小説的のヨブを假托し來る、詩人の夢想的鼓吹に煽られて此現實の苦惱をなだめ得んや。僧侶も去れ、詩人も去れ、卿等は言葉の人のみ、實物を與へよ、若し與ふ可くんば平和の實物を與へよ、爾の煽動を止めよ。



されど斯くいきまけばとて平和と希望の來るものにも非ず、たゞ夫れかく苦叫するまでの事のみ。これ故に余にして基督を信じ得ば、一地方の山民を相手にして直ちに救靈の事業に着手すべし。これに比する時は其他の事業は殆んど數ふるに足らざる也。

然るに不幸にして余には懷疑の雲しばしも晴れず。一閃二閃の大光明、時に此雲を劈き來りて心魂に徹するを覺ゆと雖、要するに懷疑の雲晴れ難し。斷然宣敎の職に従事し能はざるを悲しむ。恰かも屠所の牛の徒らに天を仰ぎて號ぶと何ぞ撰ばん、何の益もなきなり。  
望ましきものは阿片なり、せめては阿片なり、酒なり。

これ此心をあざむく方法に非ざるか。驚慌する馬の眼は物を掩ふ如かず、わが心は暗きを見て其中に苦しき影を描き得るのみなるが故に、外物を借り來りて其視力を奪ふに如かず。



天地の大事實

Full soon thy soul shall have her earthly freight

And custom lie upon thee with a weight

Heavy as frost, and deep almost as life !

わが願は此重荷を振り落さんことなり。

余は確かに感ず、わが夢みつゝあることを。夢魔の翼

の蔭に此天地の眞の光より被はれてあることを感ず。嗚呼

君はこれを感じざる乎。

われはわが夢を痛感す。幻影に迷ひつゝあることを感

ず。嗚呼夢よ夢よ、吾夢中より叫ぶ、夢よくさめよ。

美の力は吾を此夢より醒さんとするが如し。今夜、夜

更けて月を踏んで郊外を散歩したり。われを此深夢より

起すものは美の力なるが如し。

われは美を信せんとしつゝあり。

げにわれは此夢の黒き影を見たり。已に此影を見たり、

必ず星を拂うて天地神秘の美光に打たれざる可からず。

さめよ醒めよ、吾心 一個の星も汝を驚殺せしむる筈な  
るに。

嗚呼此天地の不思議に無感覺になりたる心ほど哀れあ  
さましきものは非ず。吾之れを知るが故に此無感覺より



さめんと苦しむぞかし。

われは執念深く此夢の影を追ふべし。われは一個の大なる事實を見たり、曰く、人は夢中に在り、てふ事なり。人は幻影を描きて以て己れの心を欺きつゝありてふ事なり。

人は夢中に在りて笑ひつ泣きつ叫びつ唸りつ暮す也。

人はたゞ他の人を見て暮す也。天地に於ける自己を見ざるなり。(八月二十日)

「吾とは何ぞや」 What am I? この問を發するもの嘲りて曰く、これ到底知る可からざることを自問して苦しむものなり。(徳富猪一郎氏吾に嘗てかく言へり)。され

ど此嘲笑は愚なる嘲笑ぞかし。此問は其答を求むるの問に非ず、實に此天地に於ける此われてふもの、如何にも不思議なることを痛感して自然に發したる心靈の叫びのみ。此問其れ自身にて深き心靈の聲なり。これを嘲るものは其心靈の痲痺を白狀せるなり。わが憂は此問を發すること非ずして、心より此問を發する能はざる事なり。(八月二十日)

「吾人の感情乾き果てなんとするに當り、驚異嘆美の洪水を以て再び洗禮を施すべきものは、詩と宗教との責任なり。彼等は萬物を其本色に復へらしめ、慣熟と陳腐とより成立せる盲膜を取り去り、之をして其固有の勢力を



發せしむべし」アルチナウ博士の言なる由、日本評論壇第七號の社説中に在り。(九月二日)

心に不平と悲哀とを感じた。故にそつと家をぬけ出た。弟は此時已に眠に就て居たのである。夜は更けて居た。

空は薄雲にすぎ間もなく被はれて、秋の十四夜の月が朧ろにかすんで居た。虫の聲も沈んで居るが如く思はる程、あたりが静かであつた。内を出て庭の生垣をそうて甘藷畑の前まで來た。

静かに立て月の方をふり仰ぎ、暫時して額を垂れて祈をさゝげた。神よ、天地の不思議にふれしめ玉へよと。神は吾より遠に感じた。あゝ神よ神よと叫んだのみであ

る。心に神との交通を少しも感ずる事が出来なかつた。自然は依然として吾には幻に過ぎなかつた。右の庚申塚の前をも過ぎて、田の中を出る小路の分れ路まで來た。祈は前の如くたゞ器械的に叫んだのみである。鉛の丸塊が胸を壓する様に覺えた。

彼女のためにも祈つた。涙が落ちた。

祈も叫びも凡て神よりは遠かり居た様に感ずる許りであつた。突然此地球をおそろしく感じた、しかし此電は忽ち雲間に沒した。

凡てが不思議を感ずると感ぜざるとに決するのである。てふ信念は吾に取りて岩より固い。信仰は第一である。



信仰に先つものは不思議に驚異さる事である。

驚異嘆美の念！ これは凡ての最初である。(九月二十日)

東京に住みなれし人が突然旅行して奈良に至り、月夜三笠の山に登りて獨り其頂に立ち、而て人の世が土に葬られ去りたる事を痛切に感じぬ。則ち痛切に人は亡び世は失すてふ事實を見たり。

彼の東京に在りし時はかゝる感起らざりき。則ち人は時と場所に由りて、如何なる場所にも行はれつゝある天地の大事を或は見、或は見ず、てふ事實なり。

又奈良の人は三笠山に立つも、かの旅人の如き感は起らず、則ち人にも色々ありて同じ場合に同時に置くも必

ずしも天地の大事實を同じく感ずる能はずてふ事實なり。又書籍にて「人は亡び世は移る」と讀みて成程と思つても實際は左程に感じない事が多し。則ち、注入的に天地の大事實を知る事は必ずしも實際的に此事實を痛感する事と同じからずてふ事實を見る。

而て宗教心とは天地の大事實を痛感して起る者なり。故に此經驗に同じき人は、宗教の事に吻を入るゝの權利なし。

人は事實を見ると見ざるとに在りて決す。

吾が願は如何なる場所如何なる時にも不思議なる事實を直視せんことなり。



道德、信仰上の事などにつき、「曰く言ひ難し」など申すことなり。何故に言ひ難きぞ。曰く論理に非ず、心理的作用なればなり。

世の事を思ひわづらふ勿れ。吾も人も悉く夢中に在るなり。悉く幻影中にあるなり。幻に居て幻を逐ふ、これより愚なるはなし。夢中の道德を嘲笑すべし。

夢中の人物を嘲笑せよ。

夢中の人物と夢中の道德信仰を論争批評慷慨したりとて何の益がある。

吾が夢は半ば覺めつゝあり。

吾は夢幻と驚異との境を漂搖しつゝあり。

“We are such stuff  
As dreams are made of, and our little Life Is rounded  
with a sleep!”  
げに然り、これ事實なり、詩句に非ず 詩人が直視したる事實なり。

泡よ泡よ泡よ。

凡人は夢に住み夢を追ひ、泡を食ふ。

宇宙は死と暗とを以て人を捕ふ。

泡よ、泡よ。

夢よ、死よ、暗よ。

夏の天空晴れわたりて星斗燦然たり。げにこれはわが



幼き時より幾度となく見慣れし大空の星なり。今やこれに對して何等の深痛の感も起らぬなり。されどこれ實にカーライルの所謂 “which is not we” なり “it is altogether different from us” なり。

人は吾物顔に大空の星を仰ぐ、われの眼中に映する吾の一部の如くにも感ずる様なり。されどめざめよ。はてしなき此大空の星一ツだに爾の者に非ず、爾の一部にもあらぬなり。まぼろしより出でよ。爾は彼の星の一ツなる地球の上に生滅する小物なることを。驚きさめよ。此の天地に於ける爾の位置に。

*My heart leaps up when I behold*

*A rainbow in the sky ;  
So was it when my life began ;  
So is it now I am a man ;  
So be it when I shall grow old, or let me die !  
The child is father of the man ;  
And I could with my days to he  
Bond each to each by natural piety - Wordsworth.  
げに願はしきは何時も何時も虹蜺を望み、星斗を仰ぎ  
て此の心の躍らんことにぞある。*

*Our birth is but a sleep and a forgetting ;*



The soul that rises with us, our life's star,  
Hath had elsewhere its setting,  
And cometh from afar:  
Not in entise forgetfulness,  
And not in utter nakedness,  
But trailing clouds of glory do we come  
From God, who is our home:  
Heaven lies about us in our infancy!  
Shade of the prison-house begin to close  
Upon the growing boy,  
But he beholds the light, and whence it flows,

He sees it in his joy;  
The youth, who daily farther from the east  
Must travel, still is nature's priest,  
And by the vision splendid  
Is on his way attended:  
At length the man perceives it die away,  
And, fade into the light of common day.  
なり。實に然るなり。見よ見よ、これ皆哲人の深慨する  
處ぞかし。  
宗教家と科學者と哲學者との差異の何處にあるかは心  
理學上の問題なり。



This Universe, ah me—whas could the wind man know of it ; what can we yet know ? That it is a Force, and thousandfold complexity of Forces ; a Force which is not we : That is all ; it is not we, it is altogether different from us,

Force, Force, everywhere Force ; we ourselves a mysterious, Force in the centre of thas.—Hero Worship.

Once more I say, sweep away the illusion of time—compress the threescore years into three minutes : what else was he, what else are we ? Are we not Spirits, that are shaped into a body, into an Appearance ; and that

fade away again into air and Invisibility ? This is no metaphor, it is a simple scientific fact : we start out of Nothingness, take figure, and are Appositians ; round us, as round the Veriest spectre, is Eternity ; and to Eternity minutes are as years and aeons.—Sartor



精神問題に關して中桐綱島兩氏に  
與へたる書翰

□

中桐君足下親愛愛慕極りなき友なる中桐君足下

自由の兒は半ば束縛の絆にかゝりぬ。希望の兒は半ば  
失望の鬼に捕はれぬ。平和の兒は半ば煩悶の蛇に吞まれ  
ぬ。

自ら修養の足らざるを悔むこと幾度ぞ、頭上に天光依  
然たり。然れども顧みて心裡の暗黒なるを如何にせん。

天意實に漠々として測量すべくもあらず人間の事亦愈

愈幽玄不思議なり。

理想は語り易く信仰は語り易しされど人間は知り難し  
人間は秘密なり自然の最底なり。

二十一日夜今井忠治氏に送られて獨影肅然京を發した  
る彼は三十日の正午滿腹の不平を殺して佐伯に入りぬ。

途に大久保氏を彦根に訪ふ氏伴ふて彦根城に登臨す煙  
雨の湖水今猶目にのこる。

歸省三日の間、萬感何に由りてもらす可き天地のモノ  
トニイを感じ殆んど自ら失ひし事あり、小生在京の間に  
死去せし老媪の墓と乙女の墓とを訪ひ死を思ふて多感の  
小生幾度か泣きし。



途に商估を見、漁夫を見、水夫を見兵卒を見、官吏を見、小兒を見、島を見、海を見、山を見、村落を見る、漠々たり人生の事の小生は人生の事を思ふて實に漠々たるを感ずるものなり。

佐伯の事未だ語り易からず小生は何處までも神の愛を信ずる故に何處までも忍耐する積りなれども自由を奪はるゝ事其の度を過ぎなば蹶然として去らん。

されど自由は心の自由なり心神の愛を懷はゞ自由は至る處に在らん之れ小生の信仰なり。

嗚呼親愛なる友よ相遇ふや何れの時ぞ相語る何れの時ぞ、されど兩心相照らさば相隔離するも何の憾かあらん

生も亦書を惜まざる可し、大兄生の孤獨をあはれまば金石の言を惜む勿れ、嗚呼天地に生るゝ何の縁ぞ生まれて相遇ふ何の縁ぞ、相遇ひ相語り相信じ相愛し相知る實に何の縁ぞ小生が懷を寛ふする者は實に友愛なり。

友あり遠方にあれども弟あり傍に在り之れせめてもの慰みなり早々

十月一日 (廿六年)

哲 夫

中桐確堂机下

□

中桐君足下

君の端書は昨日拜讀致しぬ君が上京せる事は已に之を



徳富氏より聞きたり實は君より何等の通知なきが故に怪しみ居るなり余は佐伯に着するや直に君に向て一書を飛ばし置きたるなり君は定て受取られたるなる可し而して君よりは何等の返事も來らず僕之を以て竊かに心配し居たるなり今端書に接し君も相變らず壯健なるを聞くを得、且つ君の住所も同じく元のまゝなるも知れて至極安心致しぬ君よ安せよ洪水は随分甚だしかりしも吾等兄弟は只だ二回轉居して之を避けたるのみ別に一物の損害をも被らざりし也而し已に全く平日に復し又た洪水の跡さへも見るべからざる程に至りぬ大分縣下にては佐伯は水害尤も輕かりし也。

君が目下の事條は未だ詳細に君より聞くを得ずと雖も徳富氏の手紙によりて多少は想像を描きぬ定めて御心配事ならん内に精神上の憂愁絶へず、外より色々の事條迫り來る、かゝる時ほど苦しき者なきは僕の已に經驗せる所なるが故に君の目下をも同情し得る也徳富氏より聞けば君は民友社に入社致すとか、僕甚だ喜ぶ也心からして祝する也民友社が他の一人を納るゝならば君ならんことを欲し君が或る社に入るならば民友社ならんことを希ふ又た君は民友社に入るに付きて僕に對し遠慮する處ありとか君のあくまで厚き友情は僕實に謝する處を知らず君がかくまでに僕を思はるゝは僕の信に感謝致す處なりさ



き給へ。君笑ふ勿れ。——一言忠告申さん。君の文章今  
少しく自在にして優しからざれば恐らく此點に於て此事  
業に成功を傷くる處あらん僕已に此事は自ら家庭雜誌を  
書きて多少感じ居るなり徳富君は自ら得意の様子なれど  
も實は僕餘り感服せず。福地源一郎氏の文章恐らく尤も  
適せん。家庭の文章に民友社流は到底今しばらくは不適  
當なり。

僕目下の事條は至極安靜なり學校の教授は日々務め居  
るなり先方の人々の氣に入らねば其れまでなりと初めよ  
り無頓着にかまへ只だ僕が盡す可き職分と信ずる事を正

れど此遠慮は實に無用にして且つ寧ろ理に當らざる事也  
之れ付きて僕の考は徳富に申し送りぬ徳富君は信義を重  
んずるの士なり。僕は只だ彼を信ず、而して又た先進と  
して彼に托しぬ故に彼が僕に關して爲す事は決して疑は  
ざる也故に君をして入社せしめたるは僕の手を拍つて喜  
ぶ處たるに過ぎず。僕は只だ君が十分茲に驥足を伸ばさ  
れんことを希ふのみ僕は只だ之を祈るのみ。

聞く家庭叢書の編輯に當らるゝとか之れ實に面白き趣  
向なり又た君の親切にして同情に富むの心は必ず此の重  
要なる事業に適することを信ず。されど一言の忠告を聞



直に盡すが故に案外自由にして心安らかなりされど殆んど三十名計りの青年少年が全く小生の支配感化示教の下に在るを思へば責任の重きを感じ竊かに恐るゝ所あるなりされど僕がすべては神に托し在るが故に事の成否、結果の如何感化の影響は只だ神のまにまに、僕は只だ爲すべきことをなすの外はあらし。

爾後精神上の苦闘は少しも止まず神を信じ神の愛に一任すと雖も猶ほ存在、人性、自然等の疑問と煩悶は少しも止まず。山に登りて感じ、谷を歩して思ひ、夕陽を遠山に眺め、朝暉を曉雲に望む時、他郷に在りて自然に親

しく交はり人間を傍より觀、人性を特別に感ずるに従ひ大なる煩悶は心底最も微なる邊より涌き來りて暫も止まず。

されど余は此の煩悶を如何ともなす能はず、而して又決して之を避けず。之れ必ず神が人間、此の愚かなる人間を教へ導き給ふ法則にして人間は之によりて進歩し俗情を破り俗眼をくぢり俗習より脱して神を親しく明白に信じ且つ認め且つ愛し得るに至らしむる者なることを信すればなり。

凡ての者は逝かん然り凡ての者は逝かん凡ての人は消えん已に逝きし者の如く吾等凡ても悉く逝かん羅馬は逝



きぬ。江戸は逝きぬ。バビロンは逝きぬ。鎌倉は逝きぬ。明治も亦忽ち逝かん。余は只だ光明にゆき光明に歸らんことを希ふのみ。已に逝かねばならぬ然り、然らば互に相愛して而して共に逝く可き也余が友に對する信仰は之れ也余は相並びて寂漠の墓地に立つ墓を見る時は則ちかく感ず。愛は葬られざるが故なり。

今や余は大にして深き意味を保つ書籍の前に立つなり。「自然」は余が今の境遇ほど余を取圍みて其美と其變化とを示したることはあらず。山あるなり。煙其半腹より立ち騰るなり。夕影其頂にのこるなり。月其の上にか

ゝる也。泉其の谷に流るゝ也、茅屋其の麓に村を爲すなり、河あるなり。孤帆漁夫を想はしめ漁歌は漁夫を思はしむ町あるなり。山上より瞰下するを得べし。然らば人間社會の活畫は目下に看らるべし。寂漠の谷ある也。以て沈思の場所たらしむ可し。海あるなり、煙波微茫吾をして一種の悠思と哀感とを惹起さしむ。天遠くして秋高し。余は日々此書籍を繙きつゝあるなり。而して余の爲に時々註解の勞をとる者はウォーヅウォース、カーライル、エマルソン等に外ならず。

金子馬治氏に一書を出さんことを期して未だ果さず甚



だ心にかゝり居る也大兄御面談の節は小生の事條御傳言を乞ふイヅレ近日必らず一書を送らん吉田友吉氏にも其後無音に過ぎぬこれまた宜しく御傳言を乞ふ其他の知人皆な宜しく願ふ也。

收二余が傍に在り無事なり大兄に宜しくとの事也草々頓首。

十月二十五日 (二十六年)

哲 夫拜

中桐愛兄机下

□

中桐君足下

久しく御ぶさた仕り候

新年來り舊年去り目出度く存じ候

一昨夜熊本より歸り候大兄十二月二十七日御認めの玉章漸やく拜讀致し候

舊年二十五日佐伯を發して歸省致し正月三日國元を發して熊本に參り高木正雄氏にも遇ふ事を得久しぶりに快談仕り候座上只だ大兄の在らざるを憾み候水谷氏を訪ひなど致し都合五日間の熊本滞在仕り十日歸路につき候

九州の中央を横斷致し三十六里の山路、二十九里を徒歩して歸り候途中阿蘇の高峯をも攀ち噴火山の荒寥にして而も偉大崇高なる光景は僕をして少なからざる感懷を抱かしめ候



此度の旅行日数は二十日（十二月二十五日より正月十三日に至る）なり

或は父母の膝下に笑ひもし泣きも致し或は小女等の家を訪ふて久しぶりに情話し或は爐を圍みて村落の悲惨史を聴き或は一家零落の跡を弔ふて舊壁老樹に哀悼の涙をそゝぎ或は屠蘇一杯の酔に乗じて村長たちと議會解散を論じ或は半夜燈前「欺かざるの記」をつくり或は大宰府天満宮を見物して端なく人生の流轉を感じ歴史の長流の煙波漂渺に驚魂し或は噴火山等に乾坤の變移默轉の恐ろしき事實を今更の如く直感し、或は寥漠たる高原平野、四顧人なき處兄弟並びて且つ歩し且つ語り、且つ黙し、日

暮れ道遠き哀感に打たれ或は木賃宿に寒夢、天涯の故人を懐ひ、或は雪の如き大霜を踏み破りて朝氣神を爽にし  
ては高淡濶歩し聞かざるに聞き見ざるに觀、二十日間の旅行回顧し來れば一卷の詩編も雷ならず面白し旅行は實に活ける學問なり。

一面天來の鏡

磨がかんと欲して雄心轉た昂がる

僕今日の警句は

希望、愛情、義務、不死、確信自立、

言葉は何時も同じ但し其の中の意味消息に至りては時



と共に人と共に異なる幸に例の陳腐語となす勿れ

僕の今日希望あり雄心ありて失神なく苦惱なし、只だ「シンセリテイ」の量の足らざるを憾むのみ但しこれも勉めて止まずんば自から其境に到らんことを期す、人間凡て神の兒なればなり吾はプラトリーの腦の所有者、基督の心の所有者なればなりこれ僕の自信なり。

「未來に伴ふの過去は恩寵なり。未來なきの過去は呪咀なり」此句則ち「不老」中の名言僕甚だ其の高想に感ず實は僕此旅行中に在りて甚だ強くこれを感じたれば也但し僕は更らに一轉して「愛は過去なり現在なり未來なり」と書しぬ僕旅行中、半夜燈前に認めたる欺かざるの記一

節を抄記して君の同情深き心情に訴へんと欲す。

二日は早朝柳井を出で、麻郷村なる吉見氏を訪ふ。午後あや嬢、及び春嬢を伴ふて平生町に寫眞を撮る。

少女の愛らしき、無邪氣なる實に吾をして此少女等が何時までも少女にして吾の何時までも青年なるを希ふの情に堪へざらしむ、哀哉老や、樂のしき罪なき時は過ぎねばならぬか吾をして只だ回想に泣かしむるか。

嗚呼現在短かく回想の恨みは永き哉。

待つ者は來ざる如くにして忽ち來り、來りし者は去りて永遠に歸らず、人生は悲哀なる哉。然り若し人間の前途に永久の希望なくんば人生は咒咀なる哉吾をして只だ



愛に生かしめよ、愛は過去なり。現在なり。未來なり。」  
以上は五日の夜熊本市の旅宿に在りて寒燈の下哀思忡々禁ず可からざる者ありて認めし也

此は余が實驗の記なるが故に余が眞實の感なれども文は勿論出たらめ故思ひの半ばも他人に通はし難きを嘆ず僕近來の警句と稱するも實は此等の實驗より痛感し來りたる者に候「少女は老ねばならぬか」言短かくして恨み永し。少女は美、愛、無罪の化身なればなり。

されど少女に注ぐ愛情を以て青苔の下に眠る老媪に注ぎ得べし。

多くの意味深き物語(實話)を聞き候へ共筆口上にて君

に語る能はざるを如何にせん。

ゲーテ(十二文豪の一つ)及び歴史研究法(平民叢書の一つ)

右御求め被下まじくや御郵送願上げ候代金は月末に送り申す可し御てかず乍らなる可く早く願候

收二よりも宜しくとの事に候

諸友に御遇ひの節は宜しく御傳言を乞ふ也早々

正月十五日正午十二時認め了はる(廿七年)

哲 夫

中桐大兄貴下



を認めらるゝに至らんことを時々教會にて祈禱仕り候之れ小生が君に對する有りのまゝの心情に御座候神を認め信する能はずして此悠々の天地に對し此紛々の人界に立つ唯れか悲叫煩悶に沈まざるものぞ。

小生は刻々冥想感想しつゝあること以前の如し、欺かざるの記も已に積んで三卷となり今は四冊目と相成候熟熟自らの目下心情の傾向を察するに確かに大なる進歩發達の途に在ることを信じ候。日々心界の進みゆくを覺へ候小生は人性を信す。故に何時か此の一個の吾も人として眞の人の域に達し得べしと確信希望致し居候。

小生は已に此世に於て吾何を爲す可きかを知りたれば

○  
中桐君足下

君其後御變もなき事と存候小生不相變壯健且つ幸福不和なり幸に御休念被下度候。久敷君の書にも接する能はず小生も亦無音に打過ぎ候段千萬心外の事に候されど小生は暫時も君を忘るゝ能はず、諸君より君が目下惱み苦みつゝあるを傳聞することに悲み申候君は小生に打明けざるが故に果して如何なる煩悶に惱みつゝあるや知らずと雖も、煩悶とは無名の暗黒なるが故に、實は君に在りても報知説明の致し様のなき事とは推察致し居候それにつけても小生は如何にもして早く君が神の光明希望慰安



只だ其れに向て進むのみに候小生今や全く美妙めうめうてふものに感想するを得るに至りたるが如く自から覺へ、自から書して「嗚呼美妙！ 余は爾の宗教を信する也」と認め申候小生今や自由なり、幸福なり、平和なり、而して慨然として爲すあらんことを欲するの猛氣日に益々昂る。只だ默契暗盟したる諸友の様子に眼を轉する時に於て痛恨に堪へざることに候吾人は眼前に濟はざる可からざる世を控へ救はざる可からざる民を目撃し乍ら、薄志弱行、偏執自誇、却て徒らに彼の頑迷不靈の輩にのみ此國民を蹂躪するにまかす。小生思ふて茲に至る毎に汪然と泣き袂を蹴て起つこと幾度ぞ、此事を大久保に告げて多少罵

言を加へ候處彼れ却て小生を目して知己に非すなど申し來る、而して又た更らに頼みに頼みたる兄に至りては今や自家の煩悶に忙がしくて又た其他を知らざるものゝ如し、小生の痛恨豈に故なしとせんや。兄の反省を希ふや切。天地悠々を思ふて小我消滅して哀情起り、哀情起りて平等を感じて慈愛の念油然而して心底より湧き來る。是に於て一種言ふ可からざる謙遜の念生じ來り、其間言ふ可からざる慰安を覺へ満足と平和とを感ず、是に於て鬱勃として而も亡びざる美妙善徳なるもの、天地に充つるあるを信じ遂に至聖唯一の眞神の大光を認むるに至る。小生の感想略此の如し、されどこれ只だ讀書哲學を



學びて製造したるものに非ずして只だ小生が魂の自然の作用活動の結果のみ。

過ぐる三日(神武祭)學生七八名と共に黒澤と申す山奥に櫻見に遠行致したる節、途々、出放題のこしをれ左の如し御一笑を乞ふ

鶯のなくなる方をふりさけば

木の間がくれに花の散り行く。

櫻花名もなき山に咲き出で、

ゆかしさまさる鶯のこゑ。

苅かの屋を見こしに山の花さきて

春日のどかに翁眠れり。

黒澤の櫻已に散り居たれば

散りにけり、いざこと問はん村人よ

花のさかりをいかにながめし。

此黒澤の櫻と申すは只だ二株あるのみなれども非常の老樹にして幾百年を経過せしとも知れず。其處をすこし離れたる路傍の草むらのうちに甚だしく古びて角々碎けたる古墳四五並び居たるを小生、見て學生諸子を顧みて此墳と彼の老櫻と何れが古き。諸子の曰く、勿論老櫻なるべしと。小生歸宅して此事を懐ひ一首を得たり。

櫻花なれこそ知らぬ此はかに



眠りし人の花の顔かんはせ

別に俗歌一つ

はるの日に獨りぶら／＼山家を訪へば

座邊の花まで迎へがほ。

兎も角も小生は大兄の言を待つこと一日に非ず候若し語り得べくんば君が目下の内部のすべてを明かされたし。

歴史研究法は大兄遂に送らざるが故に廣島に立寄りたる節求め候一讀發見する處少なからずと雖實は理論なかなか高尚斬新なるが故に十分解す 能はず、但しこれ勿

論素見一偏したるまでの故ならん熟讀の上は小生の見る處をも申上げんと存じ候

今夏は大兄西遊すべし此事は僕眞實君にすむ君は東北の人なり若し君にして大阪以西に一步を踏み來らば蓋し發見する處必ず少からずと存候小生今夏は多分國元に消光浴潮せんに、大兄來らば出来る丈け面白き趣向を以て迎へ申さん瀬戸の水光風景を見ずんば未だ日本天然の美を語るに足らず僕が郷國の近傍も又た風景凡て美なり。君未だ島の美を知らざるべし松島は嘗て君を感せしむるに足らざりしがこれ甚だ見易き道理あること也。其道理は君が來遊の節語らん、經費は決して多きを要せず。



今日より君多少用意して置いて是非都合をつけて來遊せんことをすゝむ。以上早々頓首

二十七年四月六日

哲 夫拜

中桐確堂盟兄机杖

□

拜啓

御清健の御事と奉賀候小生至極壯なり御安心被下度候小生が愛好して措かざる夏目は今將に其絶頂に達す小生日々海水に浴し面白ろく消光致し居候但し心中の沈鬱は少しも展ぶる不能カーライル、ウォーツウォース、テニソン等かじり讀みして僅かに友々得たる心地に暮し候實

は語るに足る程の友、生きたる人間には居らざれば也。

「今井君に與ふ」てふ題にて筆にまかして已に三十枚程書きたるものあり要するに。小生胸中の虹蜺を無頓着にもらしたるものに候大兄の如き哲學者先生にはノンセンスとして一笑を値ひするに過ぎざる可しとは知れども二枚三枚づゝ送るが故に試みに御一笑被下度候

君は僕の親友にして知己なり、君僕を氣の毒と思ひ給へ僕は此の秋上京して又もや生活の餓兒となり地上の街に迷はざるを得ず已ぬる哉地上は束縛なり倅者の舞臺也。但し此等の言は不信の徒の言には相違なし只だ僕は事實を言ふのみ。面白ろし面白ろし、カレージー僕は戰



はん

僕と共に上京する青年佐伯に三人若しくは四人あり皆なクリスチャン也此のうちには實に氣の毒の人もあり、僕は出来る丈け此の人々の爲め盡力する積りに候

大兄の上京は何時ぞや、上京せよ。秋までには上京せよ。東京は沙漠なり只だ友ありて暮すに堪ゆ。御互も相成るべくは相接近して暮したきものに候僕に在りては大兄の如きは力なり情なり僕も亦大兄の力となり情となるべし友なくば此の世は暮すに不堪。人は知らず僕には然り

僕は多少失望せり僕は患者のみ未熟もの也人生の薄弱

は僕に在りては肉の如く血の如く否な殆んど心の如く僕を支配す

されど實を言へば僕未だ吾國に僕よりも賢なる人を見る不能。恐らくは僕の眼の暗き故ならん神獨り智なり嗚呼然り神獨り支配す早々

七月十五日(二十七年)

哲 夫

確堂愛兄机下

地上の生命は幻のみ影のみ天に光あり永遠あり是れ眞理なり僕は此眞理を信せんとす也

□

親愛なる友、君は如何にして居給ふかこれ余の問はざ



らんと欲しても得ざる所なりこれを大久保に尋ねたり、  
不知と答へぬこれを里子に尋ねたり、亦た知らずと答  
へぬ。

余は本月三日の夜、國元を出立して六日の夜着京致し  
たり、

途に大久保を訪ふたり。

本日金子來りぬ、相携へて彼の家にとりぬ。みちすが  
ら君の事を尋ねたり。

君は實に如何にして居るか。

余が上京して先づ失望したるものは君の歸郷中なる事  
なり。殊にひそかに何故に上京せざるかに就て吾が心を

痛めぬ。余は君の心からの詳細なる手紙に接せんことを  
欲するや實に切なり。

余も再び都に迷ひ出でぬ。教師の職は自から退きたり。  
余に取りては豊かなりし俸給も自から好みてなげうち  
ぬ。上京したり。うき世の波の荒きを知りつゝも。

樂は眞友との快談なりき。手とりて、涙もて語り得る  
友なりき。而して其の最初の一人なる君は不在。

人生の不思議は余に愈々其の不思議の度をますのみ。  
余は様々の關係に迫まれて、此の不思議の黑暗をのみ  
視るに至らんとす。植村、徳富、かゝる人々は吾が靈魂  
の力を添へ得る人としも不覺。



余の爲すべきは何ぞ。余は筆の力によりて、天に泣か  
んことを欲す。されど余が根底の大信念は一日もゆるぐ  
ことなし。僅に余をさへぬ。

余は小説を書くべきか、詩を作るべきか、馬にのりて  
人を殺すべきか、講壇に立ちて空呼すべきか。

只だ尤も自然に生活せんと思ふ也。

余は有體に言へば恒産ありて山林に一良民として過し  
得れば足るが如し。余に恒産なし。故に生活の方法にあ  
こがれ迷ふ。人間は蜂よりも憐れむべきが如く見ゆ。

友なる哉。苦るしき生活のうちの樂みは友の愛なる哉。

余は戀人の愛をのぞむ。これ余にとりて恐らくは目下唯

一の救世主ならん。されど、これ余には出來可からざる  
處也。友愛は余が特權なりと信ず。故に君の上京を待つ。  
來狀を待つ。

自然の山河の美、夕陽の美、草木の美は余より遠ざか  
りたるが如し。都會は山林の生活を戀せしむ。早々

九月十日(二十七年)

哲夫

中桐確堂愛兄座右

□

拜啓

貴著病感録を讀み得たる幸福を謝する爲め敢へて此書  
を呈し且つ拙著獨歩集一冊を座右に獻じ候



獨步集中「牛肉と馬鈴薯」と題する一編は貴下に一讀の榮を賜はらんことを願ふものに候小生の作物につき諸友の批評紛々たりと雖も未だ彼の一編につきては何人も小生の意を得たる批評を與へられしものなし蓋し心の經驗の異なるが故かと存候然るに貴下の高著中驚異と宗教の一編こそ實に小生が心靈の經驗と符合するやに愚考仕り候間乍失禮御一讀を煩し度く願ふ次第に御座候  
貴著に就き所感少からず候へ共未だ拜眉の榮を得ざる未知の人として多言するも禮なしと存じさし控へ候切に唐突の言説を許し玉はんことを謹言

十月十九日夜(二十八年)

國木田獨歩生

綱島梁川様

因に申し上げ候小生は金子馬治中桐確太郎等の諸氏と同窓に御座候

牛肉と馬鈴薯は四五年前の作にて大阪の小天地と申す雑誌に出したるものに候



感想斷片

□  
火の熱きものなることを知ると其熱きことを感ずるとは同じからず。

宇宙、人生の問題に幾千かの興味を有し、これを研究し、これを知得することは、宇宙に於ける此生の現象に驚異すると同じからず。

學術と社會と、此二者は個性の發生する前に、この地上に在りて待ち居たり。

人の感情は慣るゝ可く造られたり。

眞の宗教は驚異より發せり。

驚異は宗教となり詩となりぬ。總ての詩は驚異の結果に非ず。

驚異の結果必ずしも巧妙なる詩に非ず、深遠なる學文に非ず。

驚異に始まらざる研究は空なり。

人の他動物に比して異なる點は習慣を披脱して裸々然天地に對することを得る一事なり。

科學は決して驚異を滅せず。

□



生存の自覺といふことが動物能力の到達點である。自  
己の生存を客觀し得たことが人類現今の「能力」力であ  
る。動物が其生存の必要條件として其機能に習慣性を具  
備して居るといふことは、已むを得ぬとは言ひながら、  
生存の自覺と兩立しないのである。故に動物最高の能力  
とは此習慣性を超越することである。

□

神の御旨を行はんと志す人は、忍耐と労働とを以て左  
右の武器とせよ。空想に追はれ、空想を追ふこと勿れ。  
之れ「時間」が爾を欺く方法なり。たゞ今の今、耐へ忍べ。  
たゞ今の今、力め勵め勞し働け。これ眞の希望ある者の

眞の行爲なり。冷々として空しき計企に心をなやまし、  
來る可き時を待つために今なる時を空想と焦慮とに殺す  
者は迷兒の如きのみ。

□

渠のゆく末を思へば殆んど心配に堪へざる也渠の性質  
は渠自身を詛ひ居るが如く見ゆ。渠れは野心あり、天才  
あり。されど相異なきの天才、足なきの野心なり。進む  
能はず、飛ぶ能はざる也。つねに自から其心を食ひつゝ  
僅かに其心の生命を保てり。我儘にして氣むづかし。熱  
ある怠惰の慢性病にかゝり居れり。而して高慢なり。而  
して其生涯は目的なきの生涯なり。目的あるが如くにし



て一種の幻影を追ふの生涯なり。何事をか爲さんと欲して何事をも爲す能はざる生涯なり。稚氣ありて愛すべきが如くなれどもこれ驕兒の稚氣なり。不平を酒にもらせども、酒も救ふ能はず、友人にもらせども友人も手の着く可き處を知らず。

されど渠も亦天才なり。老いて其熱靜なる時、一個の氣むづかしき好翁たらんか。將た又、

If he, were mad it was the consequence, and not the cause, of an aimless and abortive life.  
と評せらるるに至るべきか。

□

僕の説く所が間違つて居るならば願はくは教へて貰ひたい。決して瘦我慢は言はぬ僕は全く次の如くに信じて居る。

曰く。今の傳道も所謂悟道も、所謂信仰も感心しない。悉く偽である。悉く嘘である。

といふ意味は、其人自身は偽であるまい、嘘であるまい、至極眞面目であらう。併し其根本に於て、これを客觀すれば偽たり嘘たるならば如何する。と僕の信ずる處。

例へば、鼠小僧は、或一人の富を奪ふて或る一人の貧に與ふるならば、其盜は決して悪しきことに非ず、と信



じたりとせよ。諸君の眼から見れば、鼠小僧の盜賊たることは争ふ可からざる罪惡であらう。その通り、全く其通り。僕の目から観ると諸君の信は偽である。諸君は鼠小僧である。

と言はゞ諸君は怒るかも知れない。何卒僕の説く處を聞いて貰ひたい。

第一。

眞面目といふことは左まで尊むべきものでない。

眞面目とは自分を歎かざることだ。

自分を歎かざることとは愚者と雖もこれなし能ふ。

眞理の考察は愚者の能くする處に非ず。

故に愚者の眞面目は其情憐れむべし、其價あることなし。

□

空想を追求する心は終に疲勞す、これ自個の影を逐ふに等しきなり。何時しか張りつめし氣もゆるみ、はては此生のあぢきなさを哀感するに至らずんば止まざるなり。廿前後より三十前後までの壯年が、しばし半夜燈前一室のうち、或は薄暮散歩の途上、忽然として襲はる陰愁の魔はげにこれに非ざるなきか。此時彼は少年の時の如何に自由にして自然なりしかを回想し來るなり。現在われが追ふ夢の如何にはかなきかを感じるなり。此



世てふ者の如何にも單調なるを感ずるなり。わが生のゆく／＼老滅しつゝあるを感ずるなり、人生畢竟何をか求むるてふ浩嘆、やゝもすれば一滴の冷やかなる涙と共にこみ上げ來らんとす。かゝる時、彼若し善性美質の人ならんには、本然の人情油然として胸底深き處より涌きいで、獨語せしめて曰く、噫人生終に何をか求むる、止めよ止めよ、凡てこれ空なり。われ已に欺かるゝこと久し、爾空想の鬼を去れ、將來てふ魔を去れ、吾をして今の今、親子相愛せしめよ、兄弟相愛せしめよ、夫婦相和樂せしめよ、朋友相親愛せしめよ。凡て子として此時ほど愛兒の可愛ゆき時はなかる可く、兄は弟を親み、弟は兄を慕

ふ、此時にまさるはなく、夫婦互に相倚り、妻は身を夫の懷に投じ、夫はしみとと妻を戀しく思ふ事、げに此時ほど深きはあるまじ。遠にある友をなつかしく思ふも實に此時に非ざるか。彼は獨語を續けて言ふなるべし、「吾をしてたゞ人情の道をあゆましめよ、心ばかりの眞心を親子夫婦兄弟朋友の間につくさしめよ、たゞ一步、吾が足を此處に堅く立て、又自己の影を將來に追はしむる勿れ」と。一室の中ならんには此時、彼は遠き友に向けて書狀を認むるなるべし。此書狀には例の大言壯語なき替りに、慇懃に其安否を問ふなるべく、わが日常の無事を報じ、或は何時又相遇ふ事の出來るやなどの文字に眞



心あらはるべし。認めたりて後、何時になき平和と自由とを感じ、其夜の夢は春の海の如くにもならんか。  
 然るに若し、彼にして或は、親子夫婦兄弟朋友の間、深き懼ろしき波瀾ありて存し、いたく彼の心を傷け居らんには、世は彼ほど不幸なるものなからん。彼、獨語して曰はん、「噫、人生遂に何をか求むる、たゞ吾をして人情の途を歩ましめよ、されど、されど……」然り、されど彼は人情の世界にすら不具者なることを反省し來る時、如何に胸も張りさくばかりに感ずるぞ。

□

文學者とは筆にて眞理と美妙と人情とを語る者なり。

故に彼は以て百代の師たる可く、以て茅屋の民の友たるべし。そは兎も角も此不可思議なる世界に在りては、感ずる處、見る處、知る處、考究せし事を語るの外、如何ともすべき様なし。彼は如此にして暗黒なる時間の大海を突進しつゝ、行く人類の急先鋒たるのみ。人類は彼の見る處、感ずる處、考究せし處の報告を受取りつゝ、進み行くまでなり。昔は預言者ありて神より直接に其言葉を聞きたり。今は文學者ありて預言者たり詩人たり僧侶たり得べし。十九世紀以後の世界は座して説教を聞き得るの時代たり。一錢文學にてミルトンをも讀み、ローウエルをも讀み得べし。一枝の筆にて一萬人を集めたる會堂を無



形に造り得べし。

余は遂に文學者たる可き運命なるが如し、余は此狭き日本に生れたり。されど余は此日本を極愛するなり、此日本人を極愛するなり、余は日本人なり、余は日本の文學者たるべし。

余が文學者の理想は極めて高しと雖も、願ふ處は此高き理想を追ふに虚榮の念を以てせざらんことを。農夫が農を爲すの念を以て従事せんことを。決して百代の師、千古の預言者てふ如きことに由りて自負せざらんことを。余は此天職の極めて高貴なる所以を知る。されど若し一點だも虚榮の念を以て此高貴を追ふが如き時は、一

農夫の忠實に其土を耕す方、千倍萬倍高貴なることを記臆せざる可からず。余には此天職と雖決して適當なりとは信せざるなり。余には何者も適せず。たゞ怠慢者たるに適するのみ、隱遁家たるに適するのみ。されどこれ決して余の本意に非ざるが故に、心をはげまして此職をとらんとはする也。余如何なる事ありとも今の日本の文學者連と一種の競争の念を起さざる可し。自家の途を自家踏みゆくべし、翻譯もなすべし、新體詩も作るべし、小説も書くべし、歴史も書くべし、ドラマも書くべし、議論も説くべし、傳記も書くべし、説教も書くべし、決して此等に頓着せざるべし。



世間の批評には一切無頓着なるべし。

生活には困ることなき様計るべし。交際を避け、出来る丈け友を少く、深く交はるべし。

佐伯に於ける一年の生涯、

死、

三百年の後人のために書す、

列傳、

右の如き頭目は悉く余が一生の心血を注ぐに足るものなり。希くは大膽に此天地に立て、見る處、感ずる處、知る處を公言し發表し詠出し得んことを。

彼女余を捨て去りたるが故に余は殆んど此世界に慰藉

なき者となりたり。されば希くは吾が傷ける心を慰むるに、せめては此天職を尤も忠實に力めんことを、尤も樂しく勉めんことを。

若し余が文筆の勞働に由りて人情と美妙と眞理とに多少の寄興を爲し得ば幸なり。

神若し許し玉は、余は一地方の一傳道師たることを希ふなり、余にして基督を神の獨兒なりと心より宣傳し得ば凡ての者を擲て従事せん。天下此れより以上の眞理なければなり。故に余に基督は神の愛兒にして實に神の愛の表現、十字架は罪の贖なりてふ確信あらば、余は直ちに筆を擲て脚絆と草鞋とを用意せん。余若し此の如くん



ば如何に幸福ぞ。要するに文學は到底、懷疑者のかくれ場處のみ。然り、カーライルも然り、其他然らざるなしと斷言す。

□

余は思へり。吾等の趣味を惹くもの、豈に嘗に英雄、仁人、君子、烈女、節婦の傳記のみならんや。ニユートンの生時、功業、逸話のみならんや。ルーテルは如何なる生活をとらし、如何なる經驗を経たる、而して如何にして其大業を建てたる。此等の間のみが此等の趣味を惹くのみならん。此等の列傳はたトブルタークの列傳のみならんや。

此川岸に立つ茅屋の一家族の歴史は如何。其老夫が傳記は如何。彼一個の石、これ人情の記念にあらざるか、これ都會に立つ大記念よりも意味深きものならざるか。少なくとも多くの涙を含むものならざるか。彼の一村落は夕陽に眠れり。永久の平和！これには日本外史あらざる也。されどこゝには自然と人情と神の書かれたる記録存す。こゝには無数の人、男女、心靈の生滅ありし。こゝには紙鳶空に舞ひぬ、こゝには祭禮の旗朝風にひるがへりぬ、こゝには月親しく照り、見るもなしに見られ、こゝには朝な夕日おだやかに昇りたり。嗚呼これ詩人の感想か。否、事實なり。



シーザルの傳を知ることとは、外部より其人物を觀察するのみに非ず、吾等亦シーザル其人の内に入りて此世界をシーザル的に見ることなり。然らば、農夫の彼を知ることも亦た然らずや。吾等は智識の子なり。此農夫は山林原野の兒なり。此農夫には過去の歴史もあるなく、功名の舞臺もあるなし。吾々市民農夫の内に入りて此世界を見んことを願ふ。此農夫其者とならんことにはあらず。吾等は此等は此農夫に温かなる同情を寄する時に、少なくとも吾等が心胸に天空しく地濶き自由の感を叫び來たすぞ不思議なる。

□

「空想を撒て絶望を刈る」とはゲーテの語なりと覺ゆ。

げにも然り、人はみな、夢の如き將來を描きつゝ、今日を送るものなり。其夢は醒むる時なし、夢みくゝて一生を送るなり。夢ひとたび醒めし時は絶望の時なり。足のもとに忽然と大穴現はれ、彼は悶きつゝこの中に墜るぞ憐れなる。これ其最後なり。かくて彼は一生を暗き蔭に漂ふが如くして過ぎゆく。これはむかしより數しれぬ男女がくり返し／＼たる哀れの歴史なり。人の墓は、悉くこれ空想 墓 あらずや。

人は多く己れの立てしもくろみに躓くものあり。計企は多く空想なり。空想は時間が人を欺く方法なり。時間、



人を欺くに非ず。神の御手にあるべき時間を、吾もの顔に横領せんとて、おのが影を逐ふ者こそ人なれ。時間は人を欺くにあらず。數千年の昔ダビテ叫びて曰はく、「吾時はすべてなんちのみに在り」と。かく曰ひ得るものはげに千百年に一人あるのみ。

□

人生は不思議なり、實以て不思議なり。己が心に憂愁堪へざりき。彼女との愛はわれをして此憂愁より退却せしめ、自由を感せしめたり。

今や再び先きの憂愁のうちに投入せられたり。

われは此憂愁を不幸とせず(五月二十三日)

余は不信なるもの薄弱なるもの、誠足らざるもの、愛足らざるもの、罪多きもの斯く感じ來れば絶望の外はあらじ。然り絶望の影しばらく吾を襲ひたり。

されど神は凡ての者を顧み玉ふ。

人が其古くして破れたる衣を着んと欲する時は修補して之を用ふ。神の人を用ひ玉ふは、之れよりも賢く、之れよりも正しく、之れよりも意味深く、之れよりも愛深し。

神は必ず此吾をも用ひ玉ふ。其正しき用に供し玉ふ。

此信念こそ君を絶望より救ふ綱なり。此綱絶えなば吾は絶望の深淵に陥るの外あらず(同上)



養ふべきものは品性なり。築造すべきものは品性なり。品性の中心は信仰と自信と信義と同情なり。(同上)

□

書籍は一個の世界なり。こゝに山川草木あり、こゝに英雄豪傑、朋友知人あり。こゝに人情の流あり、こゝに人情の泉あり、こゝに春風吹き、夏木繁る。而もこゝに一種の寂寞あり、人をして静念默想せしむ。此世界の涙は心より湧き、此世界の笑は肺肝より溢る。世界を得るもの幸なるかな。まことの富この中にあり、まことの快樂この中にあり。

□

空漠呆然として吾等此日と夜を送りつ迎へす。されど静に思へば、吾等は不思議なる宇宙に不思議なる生活をなし、「大事實」の中に生活しつゝあるなり。過去のペトジに於て見る時は如何に深甚幽玄偉大に見ゆる事實も、現今の逢遇中に於て吾等常に呆然空漠と看過す。さめよ、さめよ、ヨブが呼びかけし星は吾等が見る星なり。ダビデが仰ぎし大空は吾等が仰ぐ大空ならずや。ア、時間！爾は事實を神聖にす。されど「今」これ實に大事實に非ざるか。

□

わが過去の生涯に於て尤も吾が悔ゆる一事は、餘りに



他人に依頼したることなり。言換ゆれば自己の利益のためには先輩及び朋友の盡力を求めすぎたることなり。而て何の利益をも得ざるのみならず非常なる損失を爲したり。わ 此依頼の爲めに如何に獨立を失ひたるぞ、如何に自個の品格を下したるぞ、如何に侮辱を受けたるぞ、且つ神とのみ立つ可き靈なる吾を人の前に屈したる事、これ如何に神をけがしたることぞ。自立獨行、はじめて信仰生ず、何となれば天地間たゞ神をのみ爾の依頼となせばなり。片言隻語、人に媚ぶることを恐れよ。何者をも求むる勿れ、たゞ神を求めよ。已に神を求む、決して人に利益を求むる勿れ。

□  
余が見る一個の世界はウオーヅウオースの世界なり。一個はカーライルの世界なりき。

□  
余は如何なる點より言ふも實に憐れむ可き者なり。外部の事條も内界の調和も余には破れ居る也。

恥と憤と戀と、三個は相挑撃しつゝ、吾が内部に戦ふ、これ信子に關する戦なり。而して功名の心と、高尚なる理想と、自清的逸樂の心と亦た相挑撃しつゝ、吾が内部に戦ふ、これ世に關する戦なり。而して此二種の戦は相混入して、一種言ふ可からざる苦惱を吾に加ふ。むし暑き室



内に密閉せられ、吾體內に重くるしき鉛塊の轉がり／＼て呼吸を塞ぎ、冷汗あぶらの如くに涌き出づるを感ず、かゝる苦惱を感ずるもの他にありや。

戀、恥、慣、悔、名、利、神、是れ「苦惱」の諸元素なり、其化合は毒血を成して吾心に侵入する也。

クリストを神の兒と信じ得る者は幸なる哉。凡て此等の苦惱より脱するを得、余はこれを知る、否、實にかすかにこれを感じず、痛感せんことを！

クリストを神の兒と信ずることに由りて此世界を見る目の如何に變ずるよ。自己を自覺する念の如何に高まるよ、他人に對する情の如何に深玄に起くよ。

されど吾人には疑惑あり、信仰極めて薄し。

□

人は世間から生れ出で世間の中に葬られてしまふのではない。世間とは人々相集合して成立つ形のよい者、人は物質、此物質は此大なる自然てふ物質の一部分である。これほど簡単な事實はないので、小學校の生徒も知つて居ることである。然るに不思議にも人は此事實を忘れてしまひ、成長するに従つてたゞ世間ばかり相手に生きて居る、世間を相手に或は泣き或は笑ひ、そして一生涯を送つてしまふ、そしてヒョッキリ死んでしまひ、彼が全く忘却して相手にもしなかつた自然の中に消滅してしま



ふ。凡そ人間界の不思議中、これほどの不思議はない。さういふ自分とてもやはり其お仲間なんで、二六時中、夢にも現にも自分の心を動かして居るものは世間である。少くとも政治とか文學とか、其他の世間の事柄である。決して自然のことなどは思はない。

處が昨晚の事であつた、自分はフト眞夜中に眠がさめた。夢も見ない熟睡の中から覺めた。一室はほの暗く、あたりは森として居る。此時自分の心に雷のやうに閃いて來た一の思想があつた。思想といはうか、感情といはうか、將た現象とすらいはうか。自分は心理學者の分類する處の智情意の何れに屬すべきものたるを知らない。

「ア、不思議だ、自分は此大宇宙の一部分だ、生命よ生命よ、此小なる生命よ、此生命は此宇宙の呼吸である」と。斯ういへば言葉の連續に過ぎないが、然し自分の感じたることは到底如何なる言葉を以てしても、言ひ現はすことは出来ない。此恐ろしき心の現象が閃めいた時、其時實に自己の存在を感じたのである。世間に於ける自己ではない、利害得喪、榮辱窮達のために心を悩ますところの自己ではない。政治、文學、宗教、はた審美學、はた倫理學等の題目に思を焦がすところの自己ではない。たゞ夫れ此我の存在、此宇宙に於ける存在を感じたのである。



しかし忽ちにして此心の現象は消えてしまつた。恰度暗にひらめく電が忽然として又暗に消えてしまふやうに。自分は再びこれと呼び返さうと力めて見てもだめであつた。しかしながら自分は此時しみじみと感じた。「さて、人間とは不思議なものである。生命とは不思議なものである。これを思ふと紛々たる世間の苦勞や榮辱はなんでもない。

□

われ人それぐの願あるべし。試は問はん我願は何ぞと。斯く問ふ時に於て、自から一の他の願の生ずる也。曰く此間に向てわれ吾を欺く事なく正しく答へ得まほし

との願なり。

「試みに問はん我願は何ぞと」。斯く再び記す。

自家獨占の勢力を此の頭上に建立せんことか。あらず。莫大の富を得て驕奢を極めんことか。あらず。然ば萬金を散じ杜子美が所謂廣厦千萬間なるものを得、大に天下の寒さを庇はんことか、あらず。位と富と名と利と、人は其慾を驅られてこれに趨る。誰れか然らざらん、吾れとも然り。然りと雖も之れたゞ吾が煩惱のみ。乃ち吾が此の願には非ず。

信仰か。吾然りと答へまほし、されど否。嘗て吾れ一度斯く願ひき。信仰は萬事の最初なりと聞く、故に凡て偉



大の事業、眞實の事業、及び平和と名づくる心靈の靜夜、希望と名くる白晝の勇氣は悉く之れより出づべしと聞けり。誰れか斯く聞きて之れを願はざるものぞ。彼の聖者を見よ彼の殉難者を見よ彼の詩人を見よ彼英雄を見よ、使徒ポーロの一生を見よ、ルーテルの一生を見よ、ミルトンの一生を見よ、クロンウエルの一生を見よと。吾が引證は此の如くなりし。

嗚呼吾が願は實に信仰か、「然り」と答へまほし、されど能はず。

今日の吾國に於て、青年少壯の者を誘ふ願は吾が願に非ず。文學者としては世界を驚かすべき傑作を得んこと、

政治家としては露西亞を壓し、朝鮮を服し、國威を擴げ、民權を張り、民を富まし、兵を強うせんこと、之れ等は吾が願ふ處にして、凡て我等當然の願なり。日本國民の一人として、世界に生れし一人として、古今英傑の功名を羨む青年の一人として此願則ち吾が願なり。

されど吾は人なり。絶海の孤島に行くも人なり。故に絶海の孤島に獨居するも尙ほ且つ吾が心を離れざる願、我を離れざること我耳目鼻口の如き願こそ、眞の吾が願にあらずや。何ぞや、何ぞや、其願を語れ。

心の悶悶を脱せんことか。吾れ何處より來り、何處に行くてふ深刻痛切の問題に到着し、其爲めに日夜眠る能



はざる心靈の大悶悶より脱却せんことが、斷じて否吾には「然り」と答へ得る實跡なし。吾は夜も極めて安らかに眠り得る也。己に煩悶なし。何ぞこれより脱出せんとの願あるべき。

戀愛か。否す。吾れ己に戀人を得たり。斯く記する時、妻吾が傍に我綿衣を縫ひつゝあるなり。われ今己に戀愛の樂しき香に酔ひつゝあり。

然らばバースと共に高原の自由を願ふか。山林よ、高丘よと叫ぶ時に於て、吾が血幾度か躍りし。斯く書するだに鶯鳥の大翼、吾が兩肩に生ゆる心地す。一搏して蒼天を衝く時、眼底に映じ來るものは峯より峯を染めて

雲霞冥々のうちに融けゆく彼の自由の色ならずや。

“My heart's in the Highland——”

の詩を高歌する時に於て如何にわれ山林の氣を負ひ、邁傲不羈の自由を感せしぞ。かゝる時、吾が眼中亦た地上の王侯なかりき、紙上の英雄なかりき。今亦然り、實に今とも然る也。されど吾が願は此自由にも非ず。

道德の人たらんことは心ある萬人の願なり。聖人君子、人誰れか其理想をこゝに置かざるものぞ。古人然り、今人然り、實に道德の人たらんことは時代と國とを問はず、人らしき人の願ひ也。最初最後の願なり。されど吾が最初最後の願は此願にあらず。



吾實に一個の願を有す。

此願だに叶はゞ乞食たるも可、不道德の人たるも可、信仰なくも可、戀人吾れを見捨つとも可、あらゆる自由奪はれ、身は石獄鐵窓の中に死するとも可、勿論貧苦に悶き名もなく朽ち貧しく苦しみ、かの枯葉新風に驅らるるが如くにして此世を去るとも可、詩人と譽められずとも、政治家と贊へられずとも、救世主と拜まれずとも可。此十九世紀に生れず、野蠻草昧、武藏野の萱原に露を掬んで生活すとも可。此願だに叶はば。是れ決して我がレトリックに非ず。

然らば、此願を吾熱心に追窮しつゝあるか。否。吾れ

靜思する時に於て、實に此願の火の如き力、電の如く心を襲ふことあり。一轉首、吾れ徐ろに起て願て他を語る時は則ち此願又電の如くに消え去り、跡をも留めず、たゞ雲の漠々たるが如きあるのみ。是れ不倫理の甚しきが如くに聞ゆ、吾が斯くまでに願ふ所の願は、即ち斯くまでに冷淡に追ふ處の願なりとは。

我戀のためには命を捨てんとまで熱中したる。如何なる運命に墜つるとも辭する處にあらずとまでに決心したり。然るに斯くして遂げ得たる彼女の愛を破るに至るとも、若し此願だに叶はゞといふ。戀亦た何物ぞといふ。其願を追ふこと、死は愚か朝食一回を止むる程にも熱心



ならず、否、一時間の靜思を與ふ程にも熱心ならず。斯く今書しつゝあり乍らも、わが此願に對する情は極めて冷やかなるぞ不思議なれ。

「試みに問はん吾が願は何ぞと」斯く三たび書す。書して吾が情は極めて冷やかなり。

答も亦た冷やかに書し得る也。

曰く宇宙人生の不可思議に向て我心靈の慄き醒めんこと、これ我願なり、慣熟と陳腐とより成立せる盲膜を取り去りて面と面と直に此天地に對せんこと之れ我願なり。

書し終て頗る冷然たり。何故ぞや、夫れたゞ冷然なり、故に我に此切なる願あり。夫れ此願あるのみ、頗る冷然

たり。あゝ之れ何故ぞや。

□

田舎の人が果して自然を愛するや——野、山、川、谷、森の美を愛するや否やを争ふ勿れ。只將に爲すべき者なる事を教へよ。將たそれを愛し得るは如何に幸福なるかを教へよ。斯くの如きは人間として、尤も人間の目的を達したる者なるを教へよ。

□

偽善にして慮りなく、形に迷うて心もさとらざる者。爾曹は聖經に載せられたる最も小さき物語をも繰返し繰返し味ふ事を知る。然るに世の中、世の書物の中には、



味ふ可き物語の多くあれども、以て其の組立の品定、文章のあやに、彼れ此れと論じ評するを知りて、其の中に如何に多くの、猶貴き者ひそみ居ざる乎と味ふ事まれなり。爾は「聖經」なるが故其の物語の味ふ可きを知りて、味ふ可き者なるが故に味ふを知らず。

歴史を讀み、英雄の傳を唱すると同時に、直に終生ぬく能はざる驕慢、不穩の血をすゝる。最早、山間、島裏の平和無罪天真なる生活をば *Dionysians* には解する能はざるに至て、彼の詩人が、逸士が、野朴なる生活を思ふが如きは、已に其の中に云ふ可からざる幽愁をふくむ。

世の人を認むる標準は、必ず次第に變するなり。今日の英雄は明日の英雄にあらず。人は只理想に立たんのみ。

世界及其の諸法則 (World and its law) 七十四丁社會と一個人との關係は如何なる法則に由て支配せらるゝか、貧人と社會とは如何なる法則に由て支配せらるゝか、詩人は如何に此社會を讀むか。政治家は如何に社會を讀むか。哲學者は如何に讀むか。聖人神人は如何に讀むか。ヒウマンライフ 人 生と世界との關係を支配する法則は如何。(路加傳九章二十三節) 又イエス衆人に曰けるは、若われに従はんと欲



ふ者は己に克て (己を棄て)、 (馬可傳八章三十四節) (Deny himself) 日々其十字架を負うて我に従へ。

「己に克つ」之れ容易ならぬ文字也。己に克つは何故に左様に難きや。己に克つとは如何の意義ぞや。蓋し「社會的」に勝つの意也。自ら社會的に勝つ能はずんば何ぞ神の道を宣ぶるを得んや。神の國の福音を宣傳ふとは、則ち此の人類社會の中より「社會的」を刈除するの謂なり。自ら先づ社會的に屈服す。何ぞ社會的に屈服せしむるを得んや。然れども悲しいかな、自ら社會的に克つ事實に難し。彼は玉の如く清き泉の如き、天の使の如き心と情と靈を以て此世に來りたれど、彼の來りたる處は天

國にあらざるなり。彼の靈の落ちたる處は則ち社會的の充塞せる社會なり。彼は五歳より十歳に、十歳より十五歳より二十歳二十歳より三十歳に、彼は次第に社會的に同化せられつゝ進むなり。而して遂に再び此の社會的を打破りて先の玉の如き泉の如き天使となる能はざるなり。あゝ社會一度び社會的となりて以來、幾多の聖人幾多の大人、東西に起りて、其の高遠なる教理を以て、社會を導き社會的と戦ひしと雖も、何時しか社會的に其教さへ同化せられて、未だ十分なる効果を見る能はずと雖も、豈に眞理に勝ち得る最後の惡魔あらんや。

イエス譬を以て教ゆ。或る時、「神の道」を「種」に譬へ、



種の播かる可き地を人心に譬ふ。曰く「路傍」曰く「磽地」曰く「棘の中」曰く「沃壤」、各其の地によりて實を結ぶ事異なるが如くに、人心によりて神の道に入り難きと易きとを教へるなり。

然れども吾は社會を以て直ちに路傍磽地荆棘に譬へんと欲す。夫れ種は極めて純良の者なり。即ち天より賜はるべき人の靈は極めて純粹無缺の者なりと雖、之を受取るべき社會は則ち社會的に満たざる處の社會なり、即ち路傍なり、曠地なり、棘の中なり、何ぞ此の種靈の正當に圓滿なる發育を成すを得んや。故に彼の聖人哲人なる者は即ち悉く此の社會的の爲め、人心の下層に壓服せら

れたる本善の種靈をして、十分なる生長を遂げしめたるものにあらざるはなし。

路可傳七章二十二節、夫れ瞽者は見跛者は行み、癩者は潔り聾者は聞き、死せし者は復活され、「貧者は福音を聞かざる。」

「貧者」！ 是れ道德問題に於ての大問題にして、社會問題に於ての大問題なり。クリストは福音を與へて貧者の心に安と強と與へんと欲し、ヴィクトルユーゴー又哀史に於て、極めて貧者に同情を表し、罪を社會の法律習慣に歸し、此れの改良に由て以て貧者を救はんと欲し、十九世紀の政治家經濟學者は富の分配法に由て之を救は



んと欲せり。共産黨出で、社會黨出で十九世紀以後の革命は貧の一字より破裂し來らんとす。「貧」は大問題なり、社會が此問題に向て満足する解釋を與へ能はざる限りは、斷じて眞正の平和來るものにあらず。

馬可傳十一章十七節、また彼等に諭て曰けるは我室は萬國の人の祈禱の室と稱へるべしと録されたるに非ずや然るに爾曹は之を盜賊の崇となせり。

夫れ神人已に萬國の爲めに神聖なる祈禱の室を與ふ、社會的は忽ち之れを盜賊の巢となせり。則ちクリスト起て之を叱咤して盜賊を一掃して室を清め教を垂る。「カーライル、英雄論百二十三丁

Formalism, Paganpopeist, and other Faleshood and corrupt semblance had ruled long enoughs

クリスト去て千五百年、彼の教も亦此の腐敗の絶頂に墜ち入りぬ。何ぞや、社會的の力なり。而してルーテル起て之れを打破し、茲に新教を起つ。新教起て今日已に三百年を過ぐ。社會的の犯す所とならずんば幸なり。

王陽明「見月」の詩に曰、匪爲嚴霜苦、悲此明月光。

夫れ嚴霜の苦を悲しむ者は貧者なり。彼は此の社會に來りて家なく、衣なく、夜具なく、煖火なし、天を仰ぎ軀を縮めて嚴霜の苦に叫ぶ。彼の明月の光を悲しむ者は哲人なり。哲人常に幽愁を懷く。西行吟すらく、歎けと



て月やは物を思はするかこち顔なる我が涙かな。月見れば千々に物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど、哲人の幽愁(メランコリ)は何處より來る乎。嗚呼何處より來る乎、永久の天地を見て直ちに人生のはかなきを感じ傷するか、永久の「天」を仰いで茲に此の紛々たる社會を顧み、忽ち茲に感傷して幽愁に沈む乎。

此憂愁とは宗教の元源なり、詩歌の元源なり。沙翁此の中より出で、ミルトン此の中より出で、ウォルツォルス此より出で、ゲエテ此より出で、ルーテル此より出で、クロンウエル此より出で、ルーソー之れより出で、佛蘭西大革命之れより出づ。

幽愁は直ちに社會的を破りて彼の理想に至る。人類の進歩茲に生氣を得、之より活火を得。

君不見東家老翁防虎患、虎夜入室衝其頭、西家兒童不識虎、執竿驅虎如驅牛(王陽明啾々吟一節)

此の此の中にて注目すべきは「兒童」「不識」「虎」の五字なり。夫れ識らざるものは兒童乎、兒童なる者は不識乎、識らずとは何を識らざるか、曰く「虎」を知らざるなり。「虎」を知らざる則虎の懼るべきを知らざるなり。懼れざる則「死」を知らざるなり言ひ換ゆれば死を懼れざるなり。之れ生をも知らざるなり。彼れには生なきなり。死なきなり。只虎の隣家の者を衝むを惡む。ウォルツォ



ルス (Ware senen) 中の小女は亦た死を知らざるなり、只  
ジョーンの愛す可きを知るのみ。

幽愁は直ちに社會的を破りし彼の理想に至る。

直ちに破りてはカーライルの所謂 (英雄論七十五丁)

direct insight の意なり。彼の理想とは則ち The divine  
idea of the world なり。

He had own sorrows: Those Sonnets of his will ever tes-  
tify expressly in what deep waters he had waded and swum.

Struggling for his life (英雄論百丁、シエクスピアー)

Deathless sorrow and pain lifelong unsurrending bottle;  
against the world. (八十丁ダンテ)

□

紛々たる世事の中に在て失望、失落、せざるを得るは  
只安心立命の地のみ。安心立命の地は帝王も國會も誰れ  
も關係支配し能はざる人間の靈の自由なる天地なり。

安心立命は信仰より來る、信仰は (How to live) の問  
題より來る。

則ち信仰の敵は命の敵なり。死を以て争はざる可から  
ず。

信仰ある人は強き人なり、「眞」の人なり、則ち命ある  
人なり、國民としても然り、尤も憐むべきかは只社會の  
上にあへぎて獨立獨歩の人、一個の人として、信仰なき



人なり。

大人は信仰を有しながらも胸臆に幽愁をたくはへて脱し能はざる所以は彼の信仰の天地は則ち寂寞の天地なればなり。

其の信じ仰ぐ所は常に極めて高遠にして只仰ぐ可し近く親み難し、時に親しむが如くなれども、人間は到底人間なり、社會的なり、純粹の仙人たる能はざるなり、あに全く社會の血ある情ある涙あるる具體の動物を離れて寂寞を感じざらんや、茲に於てか月を見て悲歌となり蟲を聞て冷哀となる。

而も彼等は、信仰の幽愁あり。幽愁の中に、無限の安

慰あるなり。無限とは何ぞ「悠悠萬古心」默契す可きのみ、辨明及ぶ處ならんや。

王陽明の喟々吟は彼の安心立命の地なり。彼は由て以て不惑、不憂と言へり。然るに彼は曰く天寒歳云暮、氷雪關河邊、幽室魍魎生、不寢知夜永、驚風起林木、驟若波浪淘、我心良匪石、詎爲戚 欣動

中心の寂寞は、自外の寂寞と打て忽ち哀れの節となる。以て如何に彼の心は彼の信仰の中にも幽愁を抱き居るかを知るべし。

此の哲人にして立て世の社會的と戦ふ。其大なる戦をなしたる者之れ大人なり。サイレントの中に過ぎ行きし



ものは凡人なり。然れども哲人たるを失はざるなり。人先づ哲人たる可し。然る後時勢と事條によりて大人となりて戦ふべし。大人とは真人の謂なり。所謂凡人なるものは未だ真人の地に至らざる墮落の中に喘ぐ憐れむ可き徒なり、然れど人は信仰に由りて皆哲人たる事を得るなり。

(馬可傳十四章三十四節) 我心いたく憂て死ぬ許りなり。

亦た以て如何に大人の胸臆に幽愁のひそむかを知り得べし。

然れども前にも言へる如く幽愁は必ずや大人、社會的弊習を見て同胞の憐む可きより發したる事を亦たいなむ

可からず。

吾を生みし者は造化なり、神なり。造化自然の美は吾を養ふ唯一の乳なり。之れを呪ふ者は福なり。

彼の小兒は則ち此の造化自然の美に同化せられ、不知の中に此の乳に由て養はるゝものなり。吾々若し瞑目して小兒の時を回顧し來れば、如何に其の嘗て告天子と共に仰ぎし天の高潔なりしぞや。魚と共に睥視し淵の清透なりしぞや。肉も動く許りなり。中心鼓動し來りて吾身の尤も深き底より熱涙の溢れ來るを覺ゆ。「百合花は如何に生長せしかを思へ、勞せず紡がざる也、我爾曹に告げんソロモンの榮華の極の時だにも其の装ひこの花の一に



及ばざりき」あゝ此の百合花の一瓣中の美を味ひ得る者はソロモンの榮華を極めたる者よりも幸福なり（即ち神の國の人なり）ウオルツオルス、泉の詩に曰く。

「谷に下りて水の流れ行くを見よ、如何にも心地よげに流れ行くなり、今、流るゝ如く斯くちとせの後も流るゝ可し、而して茲に、此の喜ばしき日、吾は如何にしばしば嘗て強健なる男、吾の此の泉のほとりに息ひしかを想ひ起すの外に他を思はざる也。吾が眼は小供らしき涙もてくもるなり、吾心は無邪氣にをどるなり、何となれば嘗て其等の日に聞ける響の今吾耳を打てばなり。」

かくして其れには、「水」吾々の枯落衰滅の中にも過ぎ行くなり。而して猶、賢なる人は年が持ち去りし者よりも年が後ろに遺せし者を多く悲しむなり。

黒鳥夏木にあり、雲雀空にあり、彼等好むまに／＼歌へかし、止めたい時は止むるなり。

彼等は自然と争ふが如き愚は決してなさぬ。彼等は幸福なる幼時を見、老いたる時亦美に且つ自由なり。

然れども吾々は重き規則に壓せられ而してもはや喜ばず、吾々は過ぎにしを喜びしが故に樂げの顔を看る」然れど人はちとせもかはりなく流るゝこの清き泉にたのしますずして、夢の中に過ぎ行く社會的の榮華に焦る。



彼の鳥は自然に従つて自然の中に老ゆるが故に、幼き時も、老いの時も自由に、美麗に幸福なる年を享く。然れども人は小兒の時のみしばし、自然の美の乳を自然に呪ふのみ。其の齡の波は後ろに此の尊き寶を遺して、重しき社會的のほだしと共に、けがれと悲しみの中に吾が白髪を漂すなり。あゝ亦悲しからずや。

前に云へる小兒の時を思ひ反して注ぐ熱涙は則ちウオルツォルスの所謂 Childish なり。此の涙は亦た多少の瞑暝の中に「後悔」「懺悔」の意あるなり。社會的より、受けたる罪とけがれを洗ひ得る者なり。

社會的に生れ出でたる情の内にて交易的程有害なる者はなし、然れども信仰なき者は其の志す處實に社會的なるが故に爲す事行<sup>す</sup>る事交易根性を脱する能はず。「なすべき事を行す」之れ信仰ある人にして始めて其の眞消息に達し得べきのみ。

古來多くの大人等が交易根上に向つて加へたる用意亦見る可きなり。

「茲に吾、存在す」意味多きかな此の言。凡ての眞面目なる働は此の中より出でざる可からず。



自然をして最後の行司たらしめよ。人間の本來の性情の上に於て、人間の上に人間を置くを許さず。歐洲に於て民主政の發達せるも亦如此。

人爲を以て「人」を不平等になし得る者と信するが故に野心起り、嫉妬起る。「人」は其價値に於て凡て平等なり。何となれば「人」の價値を定るは「人」の「生存の價値」に於ける信仰の如何によるなるが故に、社會的の標準は一つも取るに足らざればなり。

□  
死を恐れず、神を信する人は永久に生く。永久に生くる人にして始めて自由の眞味を知り得べし。

□  
社會的の「人」は尤も哀れむべき奴隷なり。

□  
新たに靈に由りて生くるの人は之れ自由を得たるの人なり。「社會的の重き法律」の束縛を脱したる人なり。

□  
「渴」と云ふ文字あり。凡て肉體的社會的に解さば、何の意味もなく反て卑しむ可し。之れを精神心靈的に味ふ事は誠に高潔なり。

□  
「時」ある者あるなし。無限なる物は「待」と云ふことを



許さず。時は無限なり、「時」に「待」なし。然るに世の人の「時」に迷って「待」に安んず。黄金時代は則ち「今」なり。黄金時代來るに非ず、黄金時代に進むにあらず、黄金時代は「今」より「今」を黄金時代に變ずるなり。如何にして變ず可き、人悉く愛と美と眞の上に立つにあり。故に黄金時代を夢む勿れ、爾が能く愛の上に美の上に眞の上に立つことを得たる時は、則ち已に爾の黄金時代に住むなり。

□  
故に、人が「物質的」生業に働くと「精神的」の事業に働くことを問はず、其の働く爾が「存在」の位置に達せしむる

が爲めに働くなり。物質的の事業に働く人は則ち「物質的」と「精神的」の一致の爲に働くなり。かくの如く働く人にして始めて其の人の働は能く眞正の働きと云ふ可し、然かれども己れ先づ己れの黄金時代に住まず、最高の理想の上に立たずして何ぞ己れの「働」を黄金時代化の爲に價值さするを望まんや。

□  
祈禱は原因にあらずして結果なり。

誠あらば禱らすとも神や守らん。然れども誠あらば禱るなり、禱る誠は神より出でたる誠なり。

□



病人だから用事がない。用事がないから空想にばかり耽つて居る。病人に取りては此の空想が何よの樂だ。

天の恵を享けて健全に活動し、空想界に遊ぶ暇など持て居ない人の爲めに、誠に我が空想の二三を語らんか。

頃は夏の真中である。蜻蛉が一尾室内に迷ひこんだ。

我が……………。

□

意味ある生活とは意味ある一日を送る事なり。無意味なる一日とは目的なき時間を送りて一日を過ごす事なり。

□

人物崇拜の根底は理想崇拜なり。理想は無形なり。人物は理想の活動せる實體なり。人は此意味に於て或人物を崇拜す。

一國民の理想の高低と趣味の深淺は其崇拜する處の人物如何に依て判せらる。此意味よりすれば米國民は如何に拜金宗の本山なる如く輕侮せらるゝとも、其國民の數がワシントン、リンコン等を崇拜する熱情の尙ほ未だ熾なる間は……………。

□

忍耐は男性の徳にして女性の徳たり難し。女性には從順は則ちこれなり。されど忍耐あるものは稀なり。忍耐



は勇氣なり。血氣の勇にあらずして、沈黙の勇氣なり。これほど偉大壯烈なものは非ず。女性の情は燃え易きも決して久しきを保たず。忍耐は不滅の感情と不屈の意志との働なり。睨して立ち、黙して進むことなり。女性には此事難し、如何なる徳と雖之れを實行するに忍耐を要せざるものは非ず。徳の行はれ難きや、急流に舟を下すが如き容易の者に非ずして、峻坂に重荷を運びて上るが如きものなり。耐 忍びて始めて達 得べし。此の故に徳の徳たる所以ぞかし。

□

人生は戦争なり。外界と戦はざる可からず。亦内界と

戦はざる可からず。外界の戦争は人に由りて異なるべし。其境遇に由りて敵とする處も異なれば也。されど内界の敵に當りては、曰く虚榮の念、利慾の念、媚嫉の念、恨悪の念、逸樂の念、肉慾の欲、これ皆日夜に人心を攻撃する處の魔軍ぞかし。英才の人も名聞の虚榮には其品性に醜を加へんとす。天才の人も逸樂と利聞とのためには其調子を亂さんとす。悪魔壁外に在り。墨汁壺を投げつけたるルーテル。絶えず戦うたる人たり血氣を以て戦ふ可からざるものは内界の敵なりとす。古手利劍を執て體内の惡毒を剝り出すが如き忍苦を以てせずんば敗北す。尙ほ人には恐ろしき敵あり。天地人生に就ての驚異の念



より來る止む能はざる疑念なり。一度此疑念に打たる、時は、感情激昂して平安を得ず、暗中を摸索して常に或者を求めつゝあり。これ實に人心に於ける最大の戦争なり。此戦たゞ一步にして吾は足る。遠き地を望まんことを願はずとは神を知るもの、智慧あるもの、神に頼るもの、言葉あるかな。「吾が時はすべてなんぢの御手に在り」、彼のダビテと共に心まことに此言を唱へ得る人は時間生命を脱して永遠の生命に入りたるなり。吾等何をか成し得ん。成す者は神なり。吾等はたゞ心ばかりをつくすのみ。

□

近來の文學社會に一種の迷信行はる。之れドラマ論、悲劇論、沙翁崇拜、等より起りし者なり。文學の極致はドラマに在りとなし、殊に悲劇に在りとなし、ハムレット、マクベス、等を以て詩文の理想となし、其極、慘澹、悲壯、痛烈なる詩情にあらんずんば、深、且つ大なる詩想を現はす能はずとなすの迷信之れなり。又一種の謬説あり。之れ審美論より起りし者なり。只美といふことを空に唱へ、理想、信仰、等の者を余り重んぜず、縫箔的文學を以て詩文の眞面目となすに至り、二種相合して終に理想なき文壇に没理想論の大戦争を惹き起して、意外の悲劇否な滑稽の見る奇怪なる現象を呈するに至りた



り。若しかゝる迷信謬説よりすれば、田家文學の如きは、  
 貴び甲斐もなきに似て、田家文人と言はるも口惜しき感  
 あるべし。湖處子がマクベス及びハムレットを模してま  
 ぼろしを作り、遂に「歸去來」に於て彼言あらしむるに至  
 りたるも、畢竟湖處子亦此の迷信謬説に感染せられたる  
 に非ざるなきを知らむや。

然りと雖も吾人が文學者及び文學に關して信ずる所は  
 之れと異なる、彼必らずしも悲劇を作るに及ばず、必ら  
 ずしも沙翁の跡を追ふに及ばず、必らずしも審美學を知  
 るに及ばず、只だ彼は詩眼を以て、「人間は如何に生活す  
 べからんか」(How to live) てふ問題に付て感得したる理想

をば、詩情を以て詩文に現はし、以て同胞人類を眞理と  
 善徳に導くべき使命を有する者、之れを文學者の標準と  
 信ず。之れ狭苦しき解釋に似たるにせよ、哲學なり、文學  
 なり果して「人間は如何に生活すべき乎」、の問題外に出  
 るを得るか。否決して出る能はず。之れ狭きに似て狭か  
 らず。かるが故に文學者……詩人、文人……たる者必ら  
 ず人類の師、同胞の師、一代の師たるを以て自ら任せざ  
 る可らず。ウォルツウォルス曰はずや、「彼の大詩人等は  
 悉く教師なり、余は又師として目せられんことを望む、  
 然らざれば、寧ろ空と思はれんことを欲す」、意氣何ぞ豪  
 なる。已に偉大なり。已に高尚なり。已に優美なり。豈



に別に偉大、高尚、優美、豪宏等の詩趣ある者を來めん。故に憂なる處は、理想信念の高下、詩眼の有無に在り。理想遠く、詩眼高からんか、路傍の野花も幾多の詩想を與へん、無限の教を供せん、夫れ自由は秘密なり、人間は大なり、一個の茅屋もウォルツウォルス、沙翁、ミルトン、ダンテ、ゴルドスミスを納れて餘りあるべく、老牧者、一村女も幾多のハムレット、幾多のマクベスよりも大なり。

□

ウォルツウォルスは「人生を思ひ自然を思ひ人類を思ひ」、而して彼の詩は出來たのである。十九世紀の小説家

中、ツルゲーネフ最も深く人生の根底に觸着して居るとの評ある所以も、畢竟ツルゲーネフの材を取る必らずしも珍奇の境にあらずと雖、人間を観るや實に此大自然の懷に置いて見たからではあるまいか。ツルゲーネフの小説を読んだ者は必らずこの消息を解するであらう。

而て今や明治の新時代は、人を一個の社會員として觀ず、彼の山間の樵夫をも此不思議なる大自然の裡に觀取せんことを要求して來た。此要求は政治界にも現はれて居る。而て尤も深く文學界に現はれて居る。

□

二十三日及び今日、日没前に室を出で海濱にいたりて



逍遙しけり。日將に箱根の山脈をこえて彼方に入らんとするを見、枯草の上に横臥してこれを目送せり。

余が願は天地の不思議を通感せんこと也。

故に余は其心を以て此落日に對しぬ。相模灣をへだてて伊豆の連峯、箱根諸山、富士山に至るまで悉く眼前に横はる。

黄金色の雲、此等の山頂にかゝる。水光天色相映す。眞紅の光線紫嵐を縫ふ。眞近かには白波白砂にころがる。仰げば底深き藍色の大空に淡然として月歩の如し。日は次第に山にかくれ初めぬ。眼を定めて靜視する時。日動く如くして動かす、地動かざる如くして動き、山を載せ

海をのせて轉せるを感ず。吾れ天地の色を見たり。又其の運動を見たり。自然の美と力とをかすかに感じ得たり。されど吾れ依然として煩惱と幻影との裡に在り。吾れを吐吞する天地不思議の中に在らず。

生とは何ぞ。死とは何ぞ。自然とは何ぞ。吾とは何ぞ。人生意義如何。との大疑問は依然として吾が感情の上に何の力もなし。

されど自然已に吾れに近し。(二十九、二月二十五日の夜記)

□

菊地長風 此人物は天生偽の無き好人物なり決して天才



に非ず、寧ろ凡才なり、感情も左程に高壯雄大ならず、  
學文は漢學が主なり、英語は讀めども英文學の感化皆  
無なり、宗教家らしくして斷じて宗教家に非ず、學者  
にもあらず、正直の人と云ふこと尤も適當なり、霸氣  
を有せず、温厚の君子人なり、功名に淡泊にして名利  
の念極めて無し、吾れは此人物を愛し又た敬す。

山踏愛山 天下の逸才なり、議論堂々たり、霸氣鬱勃た  
り、極めて豪放なれども又た如才無きこと無類なり、  
文學者にして其長は批評に在り、詩人なれども宗教的  
高遠幽玄の感情を有せず、一個の不平家なり、静岡人  
なり、江戸ッ兒なり、クリスチャンの列に在れど實は

宗教家に非ず、若此人に其政治的地位を與へんか、必  
ず見るべきものあらん、但し長く續かず、何となれば  
政治的趣味を有すれども其實政治的經綸も消息もそん  
な事には無頓着なれば也、策士なり、或意味に於て横  
着物なり、まける事大きらひ、かり／＼の隊長、其く  
せ、かなはぬ人と見れば閉口す、閉口しつゝ半分は今  
に見ろてふ調子なり、兎に角にも、類の少なき逸才に  
して意氣天に冲する男子、主我的の骨頂也。

徳富猪一郎 天下比なき才物なり、諸事悉く其の才より  
出づ、意志を以て足れるをや、熊本人なり、西郷的情  
死の意氣を或點まで慕へど、其實は御自身決してかゝ



る馬鹿氣な事をせず、男子なり、俠氣なり、但し大主  
我的なり、傍に人を動かすべき魔力を有せず、俠量な  
ること無類なり、たゞ打算的には無理に大量なり、人  
情的には天性の俠量家なり、死者には信切なり、生者  
には意志的に親切なり、情的には親切でもありでもな  
し、經綸々々と言へど人物論のみ好みて其實日本を英  
國と結ぶ位が經綸なり、宗教的直覺は殆んどなし、政  
治的本氣は熊本的なり、余は其言を信用せず其才を信  
用す、其情を信用せず、設(以下散逸)

□

近來は日々の規律や、紊れたる様なり、家庭内の規律

こそ一生一家の幸福の根源なれば、斯くては由々しき大  
事に非ずや。今日にして猛省する處なくんば後日愈其弊  
に堪へざらんとす、互に大に戒むべき事なり。

夫れ規律の本は克己より出づ。されど規律の效は習慣  
なり。克己して規律を立てんか幾何もあらずして習慣と  
なる。一たび習慣となれば最早や先きの大なる克己を要  
せず規律の功は容易く吾が有となるなり。故曰く規律は  
克己に本づく克己の效は習慣なりと。

されど克己に本づくこと云ふ以上は此處必ず多少の奮勵  
なかるべからず、多少の忍耐なかるべからず、是れ則ち  
己に克つなり。



家に規律あれば一家清福なり、勤勉なり、活氣あり、眞面目なり、而して美和其内に噴湧す。目にまかせ口にまかせ手にまかせ足にまかせて起居動作、飲食、睡眠、談笑する者の福樂と云はんや況んや何ぞ夫婦の和合といはんや。

人生幾何もなし、少壯忽ち過ぎ去る、目前の逸樂を追ふ可からず、刻下の安穩になる可からず、將に奮勵して一生一家の永久の天幸を今日に植ゑざる可けんや。

規律は家の鐵壁なり、石城なり、堅塞なり。外界の誘惑も此防禦を破る能はず、貧も窮も規律ある家にありては却て一段の高品を其家に加ふるものなり。何となれば

其家に充つる氣韻自ら清ふして、其内に住む人自から眞面目なればなり。

一冊の書を読むにも家に規律あれば三日にして結了せんに規律なくんば或は一週或は一週月にして尙ほ其書の意義を失ふ如きあり。若し此の如くんば余等の損失する亦大なりと云はざる可からず。規律あれば時間に餘悠を感じ、規律なくんば一身一家常に忙がしきに依て然も時間空消逸過す戒むべきかな。

語あり曰く天下に曲謹の小人あり必ず放肆の君子なしと一個人にして然り一家のもの大志あり、希望あり、義務あり、勇氣みち道念みち信仰かゝきん、進軍歌あり熱



禱あらば如何で一家放肆なるを得ん、  
家に規律なきは克己なきなり、克己なきは吾等に感激  
なければなり、感激する處なくして日を送る、然らば吾  
等は醉生夢死するなり、

今書して互の戒となしぬ、

二十九年三月十九日早朝燈下に記す

□

親子、兄弟、夫婦、朋友、社會同胞、凡て虚偽なり、  
誰か自己を愛すると同量の愛を以て自己以外の生物に注  
ぐ者あらむや、世の倫理學は悉く此事實を見ず或は見ざ  
る眞似するなり、故に過當の價值を親子、兄弟、夫妻、

朋友、社會同胞てふ關係の上に置き、以て人の之を買ふ  
ことを強ゆ。人の中に心よしの者も少からざるが故に又  
たこれを買ふなり。

斯る人は不びんなる哉。何となれば彼は早晚此等の愛  
なる者の眞價値を發見すべき機會に逢遇すべければな  
り。其時の彼の悲痛ほど深きものあらむや。彼は此時初  
て天地亦一個の氷宮空洞なるを感すべし。則ち激しては  
自己以外を悉く敵視する鬼となり、或は衰心しては自己  
の手に依て自己の失命を絶つの慘を行ふ。

されど世には又た天分の然らしむる處、自ら自己以上  
若くは同等の愛をば親子兄弟等の上に拂ふことの愚を自



覺する者あり。此種の人は倫理學の教理を眞面目に唱へつゝも決して、自己は倫理學が求むる處の代價を拂はざるなり、かゝる人は幸なる哉。何となれば彼は自然の理法に従へばなり。故に彼の不びんなる人が經驗するが如き悲痛を感せずして止むことを得。

理想を事實なるが如く感せしむるの害と弊は人情の上にも亦現はるゝ也。理想なり。事實は事實なり。人情の發達は吾人が今日理想せるが如き程度にまで達するやも知れず。されど其故を以て今日の人心に求むるに理想の人情を以てするは愚なり。量の七分を有する者に向て量の十分を求む、故に悲痛なる怨恨の生ずる也。

故に自己を中心として自己を愛せよ。而て自己が他より愛せらるゝの度を七分に見よ。決して十分を求むる勿れ。他を愛するも亦七分にせよ。決して一時の波動に依て十二分にする勿れ。

□

忍びて事を爲せ。

忍ぶとは恥を忍ぶ事なり。

忍べば如何なることをも爲し得る也。人殺をも盜賊をも強姦をも詐欺取財をも。

故に爲さんと欲すること、則ち爲して利益なりと信ずることは内に深く忍びて外に平然と之を爲せ。



世上の人與し易きのみ。然り、與し易きのみ忍んでこれを爲す、天下與し難きの人あらむや。

人をして我を畏しむるの必要ありと見ば、畏れしむるに於て忍ぶ也。人をして我を愛せしむるの必要ありと見ば愛せしむるに於て忍ぶなり。敬せしむるに於て忍ぶなり。人をして我を惡ましむるの必要ありと見ば、惡ましむるに於て忍ぶ也。人をして我を愚なりと思はしむる必要ありと見ば、愚なりと思はしむるに於て忍ぶ也。

畏れしむるの必要あるか、曰く有り。

愛せしむるの必要あるか、曰く有り。

惡ましむるの必要あるか、曰く有り。

敬せしむるの必要あるか、曰く有り。

愚なりと思はしむるの必要あるか、曰く有り。

必要に於ては忍ぶて爲せ、爲すに全力を盡せ、而して其必要を満たしめよ。満たしめて後、更に忍ばざる可からず。

天下の人、與し易きのみ。口を開て笑ふ人、口より物を胃の腑に送りて生る人、悉く與し易きのみ。

天下の事、忍ぶに於て何かあらむ。俗なる世上の事、忍ぶに於て成らざるなし。



20007

大正八年三月十五日讓受印刷  
大正八年三月廿一日發行

定價六十五

◀記 手 步 獨▶

編 纂 者

國 木 田 治 子

發 行 者

石 村 菊 司

東京市日本橋區米澤町一丁目七番地

發 行 所

天 分 社

電話浪花三〇七九番  
振替東京一八五〇三番

刷印日五十二月二年五正大  
行發日八十二月二年五正大

印 刷 所

東京市芝區愛宕町二丁目一番地

印 刷 者  
兄 弟 舍 印 刷 部  
松 井 勇



